千葉県教育振興財団調査報告第723集

印西市東海道遺跡

― 印西市道00-026号線道路改良に伴う埋蔵文化財調査報告書 ―

平成26年1月

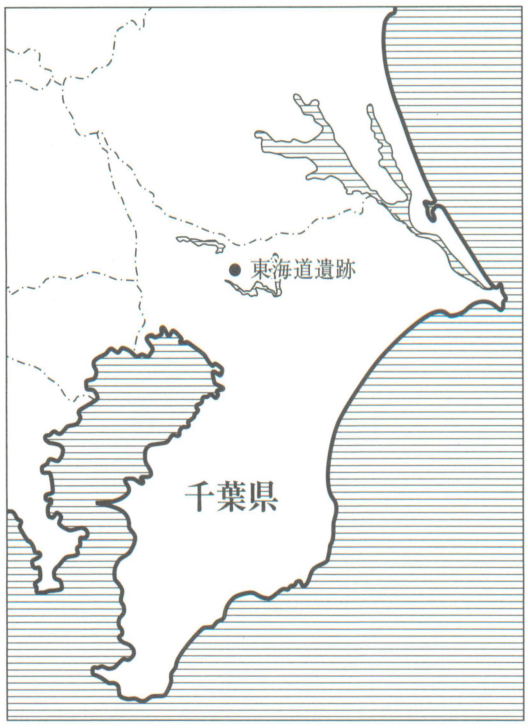
千　葉　県　企　業　庁

公益財団法人　千葉県教育振興財団

いんざいしとうかいどういせき

印西市東海道遺跡

— 印西市道00−026号線道路改良に伴う埋蔵文化財調査報告書 —



序　文

公益財団法人千葉県教育振興財団は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第723集として、印西市道00－026号線道路改良に伴って実施した印西市東海道遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、縄文時代中期や古墳時代終末期から始まる奈良時代を中心とした集落跡などが検出され、この地域の歴史を知るうえで多くの貴重な成果が得られており、この報告書が、学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成26年1月

公益財団法人千葉県教育振興財団
理事長　錦織總夫

凡　例

1　本書は、千葉県企業庁による印西市道 00 － 026 号線道路改良に伴う埋蔵文化財の調査報告書である。

2　本書は、下記の遺跡を収録したものである。

　東海道遺跡　印西市松崎字東海道 1351-2 ほか　（遺跡コード 327-010）

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県企業庁の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。

4　発掘調査および整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。

5　本書の執筆・編集は、上席文化財主事 黒沢 崇が行った。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、印西市教育委員会、千葉県企業庁ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。

7　本書の第 3 図で使用した地形図は下記のとおりである。

国土地理院発行　1：25,000　地形図「小林」平成 22 年

8　本書で使用した地図の座標値は、日本測地系にもとづく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北である。抄録の緯度・経度は世界測地系で表記した。

9　土器の観察表に記載した色調は『新版標準土色帖』に基づいている。

10　図などの表現の凡例は以下のとおりである。なお、須恵器実測図断面は黒塗りとした。

目　次

序　文
凡　例
目　次

第１章　はじめに……1
　第１節　調査の概要……1
　　１　事業の経緯と経過……1
　　２　調査の方法……1
　第２節　遺跡の位置と周辺遺跡……3
第２章　遺構と遺物……9
　第１節　縄文時代……9
　　１　遺　構……9
　　２　遺　物……10
　第２節　古墳時代以降……16
　　１　遺　構……16
　　２　遺　物……18
第３章　まとめ……29

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第１図　周辺地形図と路線調査地…… 2
第２図　上・下層確認調査位置図…… 3
第３図　周辺の主な遺跡…… 4
第４図　上層遺構分布と主な出土遺物…… 7
第５図　１５２……10
第６図　１５３……10
第７図　縄文時代出土遺物（１）……11
第８図　縄文時代出土遺物（２）……12
第９図　縄文時代出土遺物（３）……14
第10図　１０１……16
第11図　１０２……17
第12図　１４４－１……18
第13図　古墳時代以降出土遺物（１）……19
第14図　古墳時代以降出土遺物（２）……20
第15図　古墳時代以降出土遺物（３）……22
第16図　古墳時代以降出土遺物（４）……24
第17図　古墳時代以降遺構変遷図……30

表 目 次

第１表　周辺の関連遺跡一覧表…… 5
第２表　遺構一覧表…… 8
第３表　縄文時代石器計測表……13
第４表　縄文時代土製品計測表……15
第５表　古墳時代以降土器観察表……26
第６表　土製品・石製品計測表……28
第７表　金属製品計測表……28

図版目次

図版１　調査区（東から）
調査区（南から）
調査区中央（手前が北）
図版２　１０１（全景）
１０２（全景・南壁遺物出土）
１０８（全景）
１２２（全景・遺物出土）
１２７（全景）
１２８（全景）
図版３　１２９（全景・カマド右袖遺物出土）
１３０（全景）
１４５（全景）
１４１（全景・カマド）
１４４－１（全景・カマド右袖遺物出土）
図版４　１３２・１３３（全景）
１４４－２ピット群（全景）
調査区西端（全景）
１５２（全景・炉）
１５３（全景）
図版５　１１２・１１３・１１４・１３４・
１２５・１３５・１３７・１３８（全景）
図版６　１５０・１５１・１０９・１４６・
１４７・１４８（全景）
図版７　縄文時代遺物（１）
図版８　縄文時代遺物（２）
図版９　縄文時代遺物（３）
図版10　古墳時代以降遺物（１）
図版11　古墳時代以降遺物（２）
図版12　古墳時代以降遺物（３）

第1章　はじめに

第1節　調査の概要

1　事業の経緯と経過

印西市を中心に、北総地域での中核都市を形成することを目的として大規模な千葉ニュータウン整備事業が進められている。そのニュータウン構想の一環で、千葉ニュータウンの南側に千葉県企業庁による松崎工業団地の建設計画があり、工業団地周辺のアクセス道路も併せて整備することとなった。アクセス道路の整備区間は、県道ニュータウン南環状線から南下して松崎工業団地を経由し、県道千葉竜ヶ崎線に至る、総延長4kmである。事業の施工は道路利用の観点から、市道10号線と交差する地点より北側が印西市工区、南側を千葉県企業庁工区とすることとされた。この事業の実施にあたり、平成6年2月に印西町（当時）より「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会文書が千葉県教育委員会へ提出された。千葉県教育委員会では現地踏査を行い、その結果を踏まえ、平成6年3月に東海道遺跡などが事業地内の一部に所在する旨の回答を行った。この回答を受け、その取り扱いについて関係機関による協議を重ねた結果、事業の性格上やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、千葉県企業庁工区分に関しては（財）千葉県文化財センター（当時）が発掘調査を実施した。

今回報告する東海道遺跡の調査組織及び発掘調査と整理作業の期間・担当者は以下のとおりである。

調査（研究）部長	平成9年度　西山太郎	平成13年度　佐久間豊	平成24年度　関口達彦
調査事務所長（課長）	平成9年度　折原　繁	平成13年度　石田廣美	平成24年度　橋本勝雄
発掘調査期間	平成9年10月1日～平成10年2月28日		
	調査担当者　技師　田井知二		
整理作業期間	平成13年7月2日～9月28日		
	整理担当者：上席研究員　玉井ゆかり　内容：水洗注記～原稿執筆の一部		
	平成24年4月1日～5月31日		
	整理担当者：上席文化財主事　黒沢　崇　内容：原稿執筆の一部～編集		

2　調査の方法（第1・2図）

発掘調査　調査にあたり、隣接して同事業で発掘調査を実施した前戸遺跡と同じ基準で、調査区全体を覆うように20m×20mの方眼網を設定し、大グリッドとした。名称は起点から南方向にA、B・・・東方向に1、2・・・とした。そして、第2図左のように大グリッドを4m四方に25分割し、北西隅を00、南東隅を44として小グリッドとした。小グリッドの呼称はアルファベットと数字を組み合わせC13-11というように表記し、現地調査の記録類から遺物の注記にあたっても踏襲した。

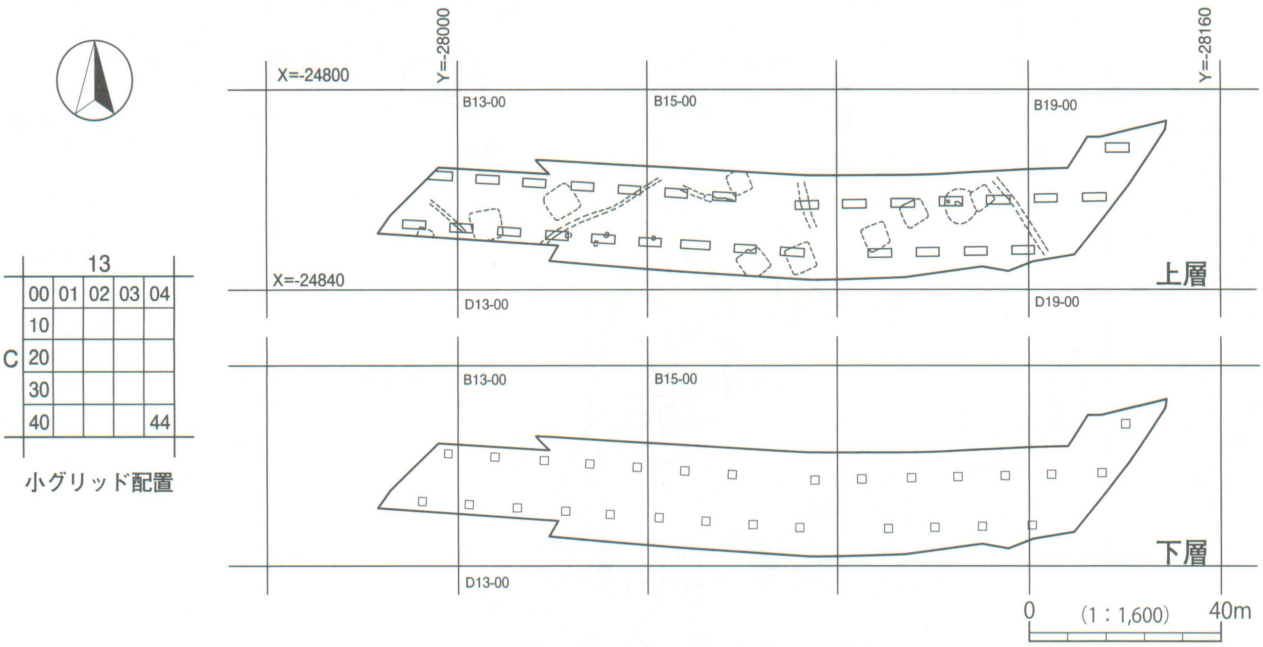
調査はまず上層の確認調査から行った。調査対象面積2,735㎡の内10%（274㎡）を目安に、微地形などを考慮に入れ、任意に2m幅の確認トレンチを設定した。確認調査の結果、事業地内の遺跡範囲全体から遺構が確認されたため、確認調査対象範囲全体を本調査範囲とした。本調査のための表土除去は重機を使用し、表土除去後遺構確認面の精査を行い本調査へと移行した。遺構番号は101から始まる3桁の数字とした。遺物は遺構毎に通し番号を付け、帰属遺構が不明確な遺物はグリッド単位で取り上げた。

第１図　周辺地形図と路線調査地

上層の本調査終了後に下層（旧石器時代）の確認調査を行った。2ｍ×2ｍの確認グリッドを調査対象面積の4％（109㎡）を目安に28か所設定した。確認調査は重機のクラムシェルを利用し、立川ローム層を上部から少しずつ掘削した土を地上へ上げ、板の上でその土をジョレンで細かく砕き、遺物の有無を確認した。しかし、旧石器時代石器の出土はなかった。

整理作業　発掘調査報告書作成にあたり、発掘調査において付けた遺構番号・グリッド番号を原則としてそのまま使用している。調査時に遺構番号が重複してしまったものに144があるが、報告では144-1（竪穴住居跡）、144-2（ピット群）として枝番号を追加記載して対応することにした。また、現地では遺構番号が付されたが、総合的に判断し遺構と判断しなかったものがある。

整理作業は、水洗・注記作業を行った後、遺物を遺構毎に種別分類してから、接合・復元作業を実施した。遺物の実測はすべて手実測による。その後、拓本・トレース・挿図作成・原稿執筆を行い、報告書刊行となった。



第2図　上・下層確認調査位置図

第2節　遺跡の位置と周辺遺跡　（第3図、第1表）

東海道遺跡は、印旛沼西岸の印旛沼低地北側の台地上、千葉県印西市松崎字東海道に所在する。標高は、遺跡の所在する台地平坦面が約26.5ｍである。水田面との比高は約16ｍである。調査前の現況は畑地であった。今回の発掘調査成果として、縄文時代中期と古墳時代終末期から始まる奈良時代を中心とする集落の存在が明らかとなった。関連する時期の周辺遺跡は第1表のとおりで、数多くの遺跡が分布する。

東海道遺跡と同台地では、同じ事業で発掘調査が実施された前戸遺跡が西に隣接して所在する。立地・調査成果から、奈良・平安時代においては同じ集落であったと捉えられる。（財）印旛郡市文化財センターでの調査区からは瓦塔片が出土しており注意される。同台地南端の中郷・三郷・三郷台遺跡でも縄文中期、奈良・平安時代の包蔵地として確認されている。台地東の松崎谷を挟んだ東側では、松崎工業団地整備事業に伴い、大規模に発掘調査の行われた松崎Ⅰ～Ⅶ遺跡が所在する。台地基部ではつながっているものの、調査成果では直接的な関連は見いだせない。縄文時代では早期、古墳時代では前期を中心とした遺跡群で

印西市
泉新田前
拾町歩
北総鉄道北総線
西の原五丁目
西の原四丁目
西の原三丁目
西の原一丁目
原一丁目
原二丁目
原四丁目
原三丁目
西の原二丁目
天王前
原山一丁目
原山三丁目
高花三丁目
高花二丁目
高花一丁目
高花四丁目
高花五丁目
高花六丁目
内川
草深
原
多々羅田
内野二丁目
内野一丁目
内野三丁目
東京基督教大学
出口
結縁寺
中側
宮内
寺台
柏木台
船尾
町田
馬場
前戸
総武カントリークラブ
中郷
松崎
高野台
泉カントリー倶楽部
神尾橋
外海道
荒井堀
新川（印旛放水路）
神野南台
馬場台
吉田
東場
西方
東京成徳大学
保品
阿宗橋
郷南
須賀
道上
八千代市
宅地造成中
少年自然の家
0
(1：25,000)
2 km

第３図　周辺の主な遺跡

第１表　周辺の関連遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	種別	縄　文	古墳，奈良・平安	その他，備考	文献No.
1	東海道遺跡	印西市松崎字東海道	集落跡	中期：竪穴住居・土坑	竪穴住居・掘立	中近世：溝	本書
2	前戸遺跡	印西市松崎字前戸	集落跡，包蔵地	中期：土器，石器，土器片錘	竪穴住居・掘立・瓦塔片	中近世：溝・土坑	14・18
3	新井堀Ⅰ遺跡	印西市草深字新井堀	包蔵地，馬土手	中期：土器，石器，土器片錘	－	近世：馬土手・溝	10
4	新井堀Ⅱ遺跡	印西市草深字新井堀	包蔵地	早期：炉穴・炉跡・陥穴・包含層	－	－	14
5	船尾白幡遺跡	印西市船尾字白幡	包蔵地、集落跡	早期：炉穴・陥穴，中期：竪穴住居	竪穴住居，掘立多数・墨書	－	17
6	西根遺跡	印西市船尾字西根	包蔵地	後期：流路・土器集中地点	古墳前期:堰，奈良・平安:流路・墨書・形代	中近世：流路・漆椀・銭貨	19
7	船尾町田遺跡	印西市船尾字町田	集落跡，古墳	中期・後期：土器・石器	古墳前期：竪穴住居多数，後期：古墳３基	－	1
8	向ノ地遺跡	印西市船尾字向ノ地	包蔵地	早期：土器	古墳前期：竪穴住居，奈良・平安：竪穴住居	中近世：土坑・溝	7・8
9	油免遺跡	印西市船尾字油免	包蔵地	土坑・土器・石器	古墳中・後期:竪穴住居，奈良・平安:竪穴住居・畿内産土師器・壺Ｇ	中近世：土坑・溝	16
10	船尾貝塚	印西市船尾字反町	貝塚	早期：土器	－	－	－
11	香典遺跡	印西市船尾字香典	包蔵地	－	須恵器	－	－
12	山王台遺跡	印西市結縁寺字山王台	包蔵地	土器	須恵器	－	－
13	松崎Ⅰ遺跡	印西市松崎字漣	包蔵地，集落跡	早期：炉穴・土坑	古墳前期:竪穴住居多数・方墳，奈良・平安：竪穴住居	中近世：地下式坑・土坑・掘立・溝	13
14	松崎Ⅱ遺跡	印西市松崎字漣	包蔵地，集落跡	土坑・陥穴	古墳前期：竪穴住居，奈良・平安：方形墳墓・竪穴	中近世：掘立・地下式坑・馬土手・溝	12
15	松崎Ⅲ遺跡	印西市松崎字漣	包蔵地	早期：竪穴住居・炉穴・土坑，後期：土器	奈良・平安：竪穴住居・土坑	中近世：居館・土塁・掘立・地下式坑・溝	20
16	松崎Ⅳ遺跡	印西市松崎字漣	包蔵地	早～後期：土器，陥穴・土坑	－	中近世：陶磁器・銭貨	21
17	松崎Ⅴ遺跡	印西市松崎字漣	包蔵地	早期：炉穴・陥穴，早期～後期：土器	古墳前期・奈良・平安：竪穴住居	中世：陶器	21
18	松崎Ⅵ遺跡	印西市松崎字漣	包蔵地	中・後期：竪穴・土坑	奈良・平安：竪穴住居	中近世：地下式坑・土坑・井戸	15
19	松崎Ⅶ遺跡	印西市松崎字漣	包蔵地	中期：竪穴・土坑	－	－	15
20	山ノ下遺跡	印西市松崎字山ノ下	塚，包蔵地	－	土師器	塚	－
21	中郷遺跡	印西市松崎字中郷	包蔵地	早・前・中期	古墳後期～奈良	－	－
22	大久保遺跡	印西市松崎字大久保	包蔵地	－	古墳後期・奈良：竪穴住居，掘立		11
23	三郷遺跡	印西市松崎字大久保	包蔵地	中期：土器	古墳後期：土師器	－	－
24	三郷台遺跡	印西市松崎字三郷	包蔵地	中期：土器	平安：土師器	－	－
25	小台遺跡	印西市松崎字小台	包蔵地	中・後期：土器	古墳後期：土師器	－	－
26	東海道東遺跡	印西市松崎字東海道	包蔵地	－	－	火皇子神社遺跡	－
27	西ノ原第１遺跡	旧印旛村吉田字西ノ原	包蔵地	早・後期：土器	土師器・須恵器	－	－
28	西ノ原第３遺跡	旧印旛村吉田字西ノ原	包蔵地	前・後期：土器	埴輪・土師器	中近世：ピット	22
29	向山第１遺跡	旧印旛村吉田字向山	包蔵地	－	土師器	－	－
30	向山第２遺跡	旧印旛村吉田字向山	包蔵地	後期：土器	古墳後期・奈良・平安：土師器	－	－
31	佐五原遺跡	旧印旛村吉田字佐五原	包蔵地	後期：土器	土師器	近世：道路状遺構	4
32	仲内遺跡	旧印旛村吉田字仲内	包蔵地	－	方墳，平安：竪穴住居	中近世：土坑・陶器・銭貨	5・7
33	佐五原第２遺跡	旧印旛村吉田字佐五原	包蔵地	溝・土器	－	近世	－
34	馬々台遺跡	旧印旛村吉田字馬々台	包蔵地	早・前・後期：土器・石器	埴輪，古墳前期：土師器		－
35	木戸口遺跡	旧印旛村吉田字木戸口	包蔵地，集落跡	炉穴，中期:竪穴住居・土坑，後期:土器	方墳，奈良・平安：竪穴住居・掘立・土坑	中近世：土坑・溝・掘立・地下式坑	2～5
36	トケ前遺跡	旧印旛村吉田字トケ前	集落跡	早期～後期：土器，早期：炉穴，後期：竪穴住居・土坑	奈良・平安：竪穴住居		6
37	遂昌路遺跡	旧印旛村吉田字遂昌路	集落跡	炉穴，土器	古墳前期・奈良・平安:竪穴住居多数・掘立・土坑	中世：土坑	3・4
38	向込内遺跡	旧印旛村吉田字向込内	包蔵地	中・後期：土器	古墳前・後期：土師器，鉄滓		－
39	東場遺跡	旧印旛村吉田字東場	包蔵地	陥穴，中・後期：土器，後期：竪穴住居・土坑	古墳後期:竪穴住居多数，奈良・平安:竪穴住居・方形墳墓・土坑	中近世：土坑・溝 平成23年度県道調査	5・7・8
40	馬見台遺跡	旧印旛村吉田字馬見台	包蔵地	早期：土器	土師器・須恵器		－

ある。奈良・平安時代の遺構として松崎Ⅱ遺跡で検出された方形墳墓を関連すると捉えるならば、同台地上での居住域と墓域との関係を示している可能性がある。さらに、東側台地の吉田地区では、泉カントリー倶楽部コース造成や県道八千代宗像線などの事業での調査成果がある。縄文時代では早期の遺構・遺物が目立つ。奈良・平安時代の集落では遂昌路・木戸口遺跡で竪穴住居跡・掘立柱建物跡が確認されている。

逆に、東海道遺跡西側の船尾の谷を挟んで西側の船尾地区では、千葉ニュータウン事業で発掘調査の行われた船尾白幡遺跡・鳴神山遺跡と低湿地遺跡である西根遺跡の調査成果が特筆される。豊富な遺構、墨書土器を中心とする遺物などから古代印旛郡船穂郷の中心的集落の状況について明らかにされている。油免遺跡でも比較的広い面積の調査が実施されており、古墳時代中・後期や奈良・平安時代の集落について成果が上がっている。特に、奈良・平安時代の遺構から畿内産土師器・長頸壺が出土していることが注目される。

注）周辺遺跡分布図は、1997『千葉県埋蔵文化財分布地図（1）-東葛飾・印旛地区（改訂版）』千葉県育委員会を主に参考にして作成した。なお、表に記載した文献Noは下記文献と対応する。

1　古内茂 1984『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅷ 船尾町田遺跡 谷田木曽地遺跡 谷田神楽場遺跡』千葉県文化財センター

2　1988『財団法人印旛郡市文化財センター年報４－昭和62年度－』印旛郡市文化財センター

3　1989『財団法人印旛郡市文化財センター年報５－昭和63年度－』印旛郡市文化財センター

4　1991『財団法人印旛郡市文化財センター年報７－平成２年度－』印旛郡市文化財センター

5　1992『財団法人印旛郡市文化財センター年報８－平成３年度－』印旛郡市文化財センター

6　喜多裕明ほか 1992『千葉県印旛郡印旛村トヶ前遺跡発掘調査報告書－印旛村泉カントリー倶楽部コース造成事業地内埋蔵文化財調査（１）－』印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第72集

7　1993『財団法人印旛郡市文化財センター年報９－平成４年度－』印旛郡市文化財センター

8　1994『財団法人印旛郡市文化財センター年報10－平成５年度－』印旛郡市文化財センター

9　野村優子 1999『平成10年度印西市内遺跡発掘調査報告書 大久保遺跡 向之地遺跡』印西市教育委員会

10　今泉潔 2002『印西市新井堀Ⅰ遺跡・新井堀Ⅰ野馬土手－印西市道00-026号線道路改良に伴う埋蔵文化財調査報告書－』千葉県文化財センター調査報告442集

11　岩崎勉 2002『千葉県印西市大久保遺跡（第２・３地点）－印西市道22-059号線及び22-055号線埋蔵文化財調査－』印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第188集

12　西野雅人ほか 2003『松崎地区内陸工業用地造成整備事業埋蔵文化財調査報告書１－印西市松崎Ⅱ遺跡－』千葉県文化財センター調査報告445集

13　内田龍哉ほか 2004『松崎地区内陸工業用地造成整備事業埋蔵文化財調査報告書２－印西市松崎Ⅰ遺跡－』千葉県文化財センター調査報告471集

14　内田龍哉ほか 2004『印西市新井堀Ⅱ遺跡・前戸遺跡－印西市道00-026号線道路改良に伴う埋蔵文化財調査報告書－』千葉県文化財センター調査報告第481集

15　小笠原永隆ほか 2004『松崎地区内陸工業用地造成整備事業埋蔵文化財調査報告書３－印西市松崎Ⅵ遺跡・松崎Ⅶ遺跡－』千葉県文化財センター調査報告487集

16　阿部有花 2004『千葉県印西市油免遺跡（第２地点）－船穂コミュニティーセンター建設地内埋蔵文化財調査－』印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第202集

17　糸川道行ほか 2004『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XVI－印西市船尾白幡遺跡－』千葉県文化財センター調査報告477集

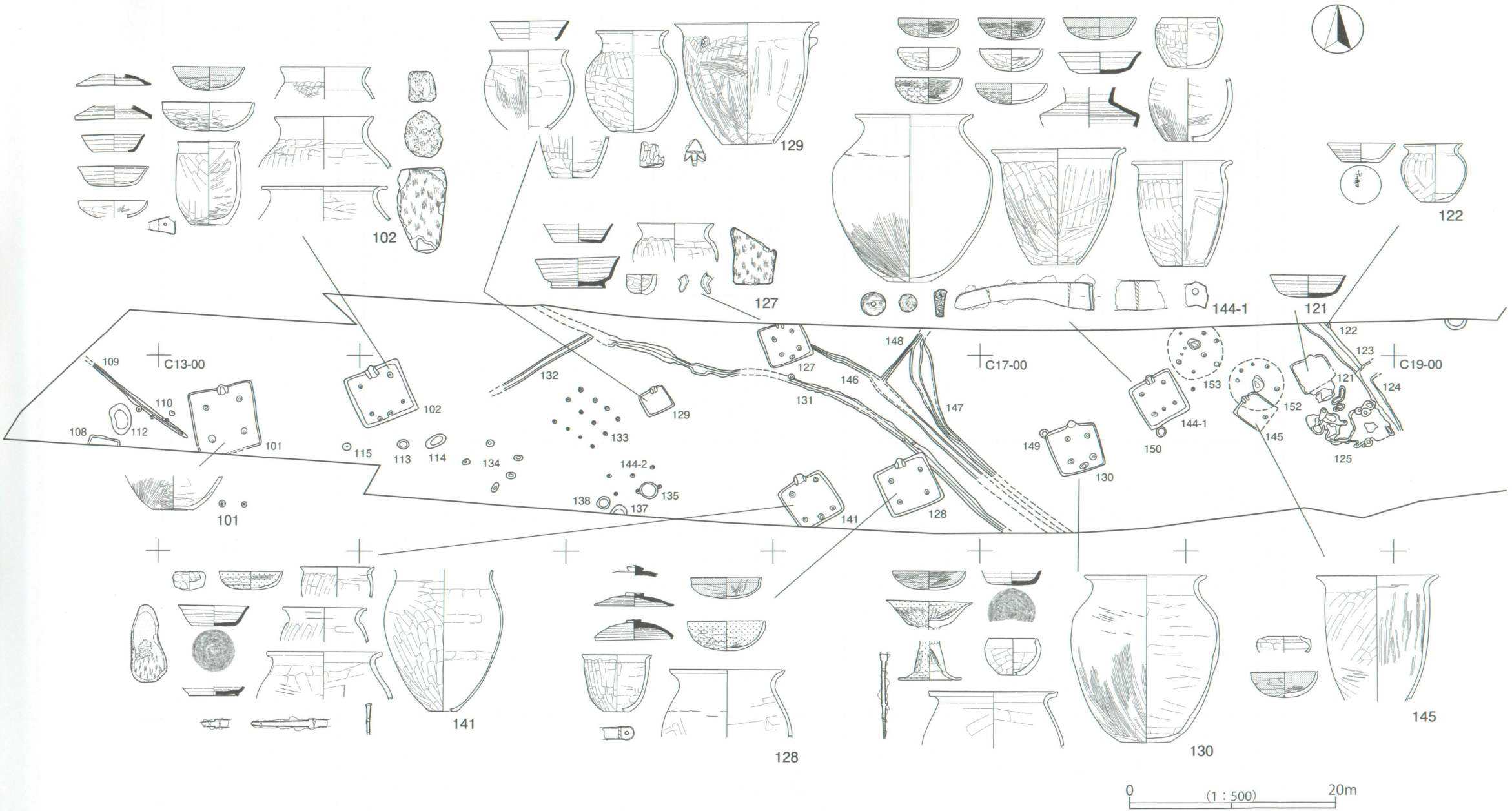
18　伊藤弘 2005『千葉県印西市前戸遺跡－印西市道00-116号線埋蔵文化財調査－』印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第223集

19　小林信一ほか 2005『印西市西根遺跡－県道船橋印西線埋蔵文化財調査報告書』千葉県文化財センター調査報告第500集

20.　岡田誠造ほか 2006『松崎地区内陸工業用地造成整備事業埋蔵文化財調査報告書４－印西市松崎Ⅲ遺跡－』千葉県文化財センター調査報告547集

21.　大内千年ほか 2006『松崎地区内陸工業用地造成整備事業埋蔵文化財調査報告書５－印西市松崎Ⅳ遺跡・松崎Ⅴ遺跡－』千葉県文化財センター調査報告548集

22.　2007『財団法人印旛郡市文化財センター年報23－平成18年度－』印旛郡市文化財センター



第４図　上層遺構分布と主な出土遺物

第２表　遺構一覧表

縄文時代

遺構No.	種類	位置（主グリッド）	長軸（m）	短軸（m）	主軸	時期
152	竪穴住居跡	C18-01	径 5.2		－	縄文時代中期
153	竪穴住居跡	B18-40	径 5.3		－	縄文時代中期
110	土坑	C13-10	1.1	0.4	－	縄文時代
111	土坑	C12-14	0.6	0.5	－	縄文時代
112	土坑	C12-13	3.1	2.1	－	縄文時代
113	土坑	C14-21	1.1	1.0	－	縄文時代
114	土坑	C14-21	2.1	1.0	－	縄文時代
115	土坑	C13-24	径 0.8		－	縄文時代
124	土坑	C18-04	1.6	?	－	縄文時代
125	土坑群	C18-13	ピット多数		－	縄文時代
135	土坑	C15-32	径 1.7		－	縄文時代
137	土坑	C15-41	1.5	?	－	縄文時代
138	土坑	C15-30	径 1.2		－	縄文時代
149	土坑	C17-21	径 0.9		－	縄文時代
150	土坑	C17-24	径 0.9		－	縄文時代
151	土坑	B19-41	2.0	?	－	縄文時代

古墳時代以降

遺構No.	種類	位置（主グリッド）	長軸（m）	短軸（m）	主軸	時期
101	竪穴住居跡	C13-11	6.5	6.3	N－11°－W	古墳～奈良時代
102	竪穴住居跡	C14-10	5.0	5.0	N－22°－W	古墳～奈良時代
108	竪穴住居跡	C13-23	2.8	?	?	平安時代？
121	竪穴住居跡	C18-03	3.2	3.0	N－25°－W	古墳～奈良時代
122	竪穴住居跡	B18-43	?	?	?	平安時代
127	竪穴住居跡	B16-40	4.0	3.9	N－19°－W	奈良時代
128	竪穴住居跡	C16-33	5.0	4.7	N－21°－W	古墳～奈良時代
129	竪穴住居跡	C15-12	2.5	2.2	N－27°－W	古墳～奈良時代
130	竪穴住居跡	C17-22	4.6	4.5	N－18°－W	古墳～奈良時代
141	竪穴住居跡	C16-30	4.6	4.4	N－29°－W	奈良時代
144-1	竪穴住居跡	C17-14	4.1	4.1	N－31°－W	古墳時代終末期
145	竪穴住居跡	C18-11	3.1	2.8	N－53°－W	古墳時代終末期
133	掘立柱建物跡	C15-10	2×3		N－43°－W	奈良・平安時代？
144-2	ピット群	C15-31	6ピット		N－78°－E	奈良・平安時代？
134	ピット群	C14-33	3ピット		－	奈良・平安時代？

遺構No.	種類	位置（主グリッド）	長さ（m）	幅（m）	方向	時期
109	溝	C12-03～C13-20	12.0	0.4	NW-SE	中・近世
123	溝	B18-43～C19-10	14.5	1.2	NW-SE	中・近世
131	溝	B15-41～C17-40	43.0	0.8	NW-SE	中・近世
132	溝	C14-03～B15-40	10.0	0.6	NE-SW	中・近世
146	溝	B16-41～C17-30	21.5	0.8	NW-SE	中・近世
147	溝	B16-43～C17-30	16.2	0.8	NW-SE	中・近世
148	溝	C16-02～B16-43	6.0	0.5	NW-SE	中・近世

第２章　遺構と遺物

東海道遺跡では、主に縄文時代中期と奈良時代を中心とする集落が確認された（第４図）。縄文時代の遺構としては調査区東側において、明確な掘り込みは確認できなかったが、炉と柱穴の配置から竪穴住居跡と考えられる遺構を２軒（152・153）検出した。竪穴住居跡以外では土坑が調査区全体から検出されたが、遺物の出土が少なく、時期を特定できるものが少ない。覆土なども加味した調査時の見解を重視して縄文時代に帰属するものとし、遺構外から出土している遺物から時期は縄文時代中期がほとんどであると考えられる。土坑の中でも調査区中央部南端の135・137・138は、平面的に大きく、底面は平らであり、小竪穴とも捉えられる。調査区東側のピットがまとまって検出された125については、プランを捉えられず、遺物の出土もなかったが、竪穴住居跡が重複している可能性がある。遺物としては中期の加曽利Ｅ式期前半の資料がほとんどで、わずかに後期堀之内式の土器破片が出土している。

弥生時代から古墳時代後期にかけての遺構は検出されなかった。その後、分布は密ではないが、古墳時代の終末段階から奈良・平安時代にかけての集落跡が確認された。この時期の遺構は竪穴住居跡を主体とするが、小規模な掘立柱建物跡も検出された。確実な掘立柱建物跡は総柱建物風の133の１棟のみである。周辺の134・144-2（ピット群）は整然とは並ばないが、建物跡としての機能が考えられる。

溝については時期を特定できないが、現在の区画や道路に沿って検出されていること、覆土などから考えて中・近世以降から続くものとした。北西－南東方向に延びるものが多く、他にそれらに直行する方向のものがあり、同時期に機能していたことが窺える。

なお、検出された遺構の規模・位置・時期などは一覧表（第２表）のとおりである。次節以降、時期毎に主な遺構と遺物を取り上げて説明する。

第１節　縄文時代

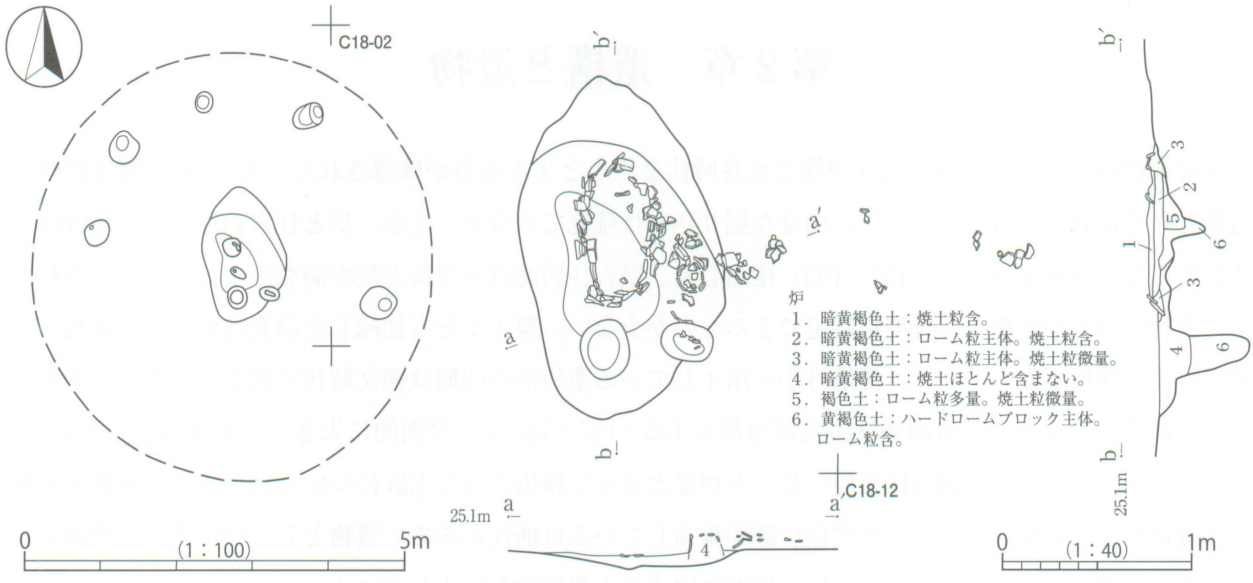
１　遺　構

１５２（第５図、図版４）

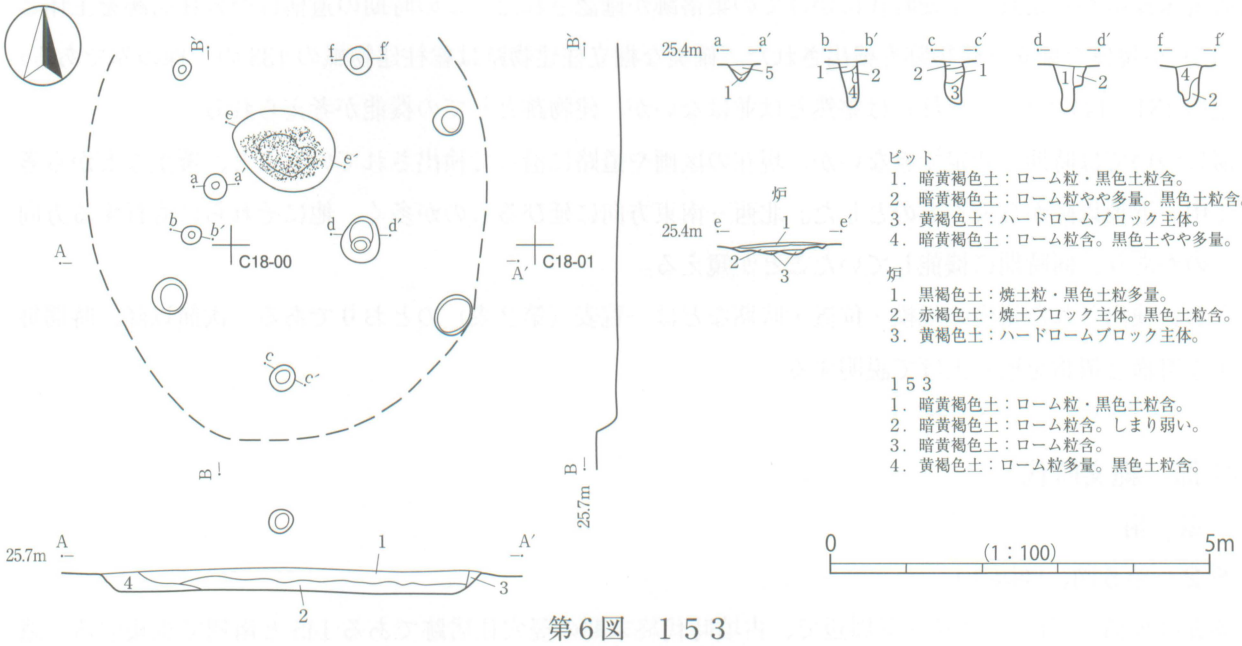
調査区東側のC18-01グリッド周辺で、古墳時代終末期の竪穴住居跡である145と南側で重複する。遺構の掘り込みは確認できなかったが、炉と柱穴の配置状況から考えて、平面形は径5.2ｍ程度の円形を想定できる。炉は土器囲炉で、土器の南側に深いピットがある。他のピットは炉の北半分を巡るように５基検出された。遺物は炉の周辺を主体に多く出土した。

１５３（第６図、図版４）

調査区東側の152(竪穴住居跡)の西隣B18-40グリッドに位置する。遺構の掘り込みは部分的に確認でき、炉と柱穴の配置状況から考えて平面形は径5.3ｍ程度の円形を想定できる。北側は一部調査区外となる。炉は楕円形で東西に長軸をもち、焼土が厚く堆積する。想定住居内のピットは小規模なものも含めて９基検出された。遺物は炉の南側周辺を主体に出土した。



第5図　１５２



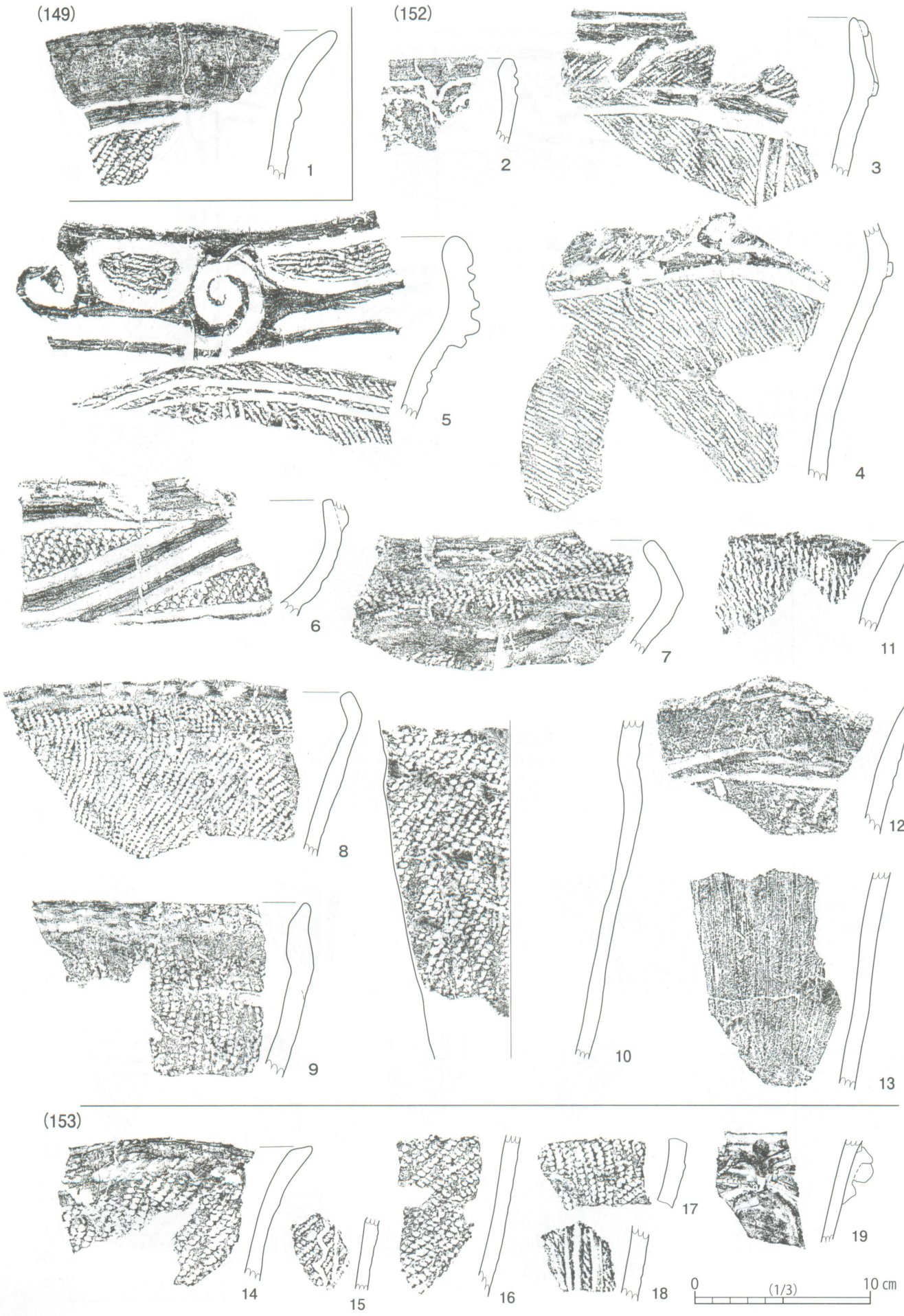
第6図　１５３

2　遺　物

土　器（第７・８図、図版７・８）

出土縄文土器の時期には中期から後期のものがあるが、ほとんどが中期の加曽利ＥⅠ式を主体とする。

１は149（土坑）からの出土土器で、口縁が大きく外反する。口縁部は横方向の細かいミガキ、断面丸みのある隆帯を挟んで、その下位は縄文が施文される。２～13は152（竪穴住居跡）出土土器である。キャリパー形の深鉢土器が主体である。２は口縁周辺に横位の押引文が施される。口縁内面に稜があり、胎土には雲母粒・白色砂粒が目立つ。３～６は口縁部文様帯に隆帯を貼付し、渦巻文・縄文が充填される。３・４は同一個体と考えられる。７～10は縄文のみ、11は明瞭に撚糸文が施文される。10は小型で細身の形状であり、被熱で器面が荒れている。13は細かい条線が縦位に施される。14～19は153(竪穴住居跡)出土土器である。14～17の地文はＬＲ縄文で、やや焼成が不良である。18は撚糸文を地文とし、15・18



第７図　縄文時代出土遺物（１）＜遺構出土＞

第８図　縄文時代出土遺物（２）＜遺構外出土＞

には縦位の沈線文が施される。19は断面三角形の隆帯に沿った押引文と縦位の棒状粘土紐で構成される。

20～54は遺構外出土土器である。20は胎土に白色砂礫が多く含まれる口縁破片である。口縁部文様体の沈線区画内を縦位の沈線で充填する。21は口縁部文様帯に隆帯による波状文、22～30は渦巻文が施される口縁部破片である。区画する隆帯は稜がはっきりしている。31～38はやや内湾・直立気味に立ち上がる口縁部破片である。地文の縄文主体の文様構成であり、横位のやや幅広の沈線や刺突も施される。39～43は胴部破片で、垂下する沈線・磨り消し帯がみられる。44は底部近くの破片である。45～54は後期の土器で、堀之内式が主体であると考えられる。実測個体以外の出土数は少ない。45は口縁上端部に横位の沈線と垂下する3本の沈線が施される。46～52は平行沈線を主体とする文様構成である。53は口縁内部に沈線が巡る。54は無文でミガキが施されるやや黒色の口縁部破片である。雑に突起が貼り付けられる。

土製品（第9図、第4表、図版9）

今回の調査区で出土した縄文時代の土製品はすべて土器片錘であった。縄文時代の遺構に確実に伴うものは土1のみで、153（竪穴住居跡）からの出土である。遺存がやや不良のため実測図は作成しなかったが、土器片錘と判断できるものは他に10点あり、今回の調査区では合計46点出土した。基本的に糸掛けの切り込みは長軸方向の両端に刻まれる。軸長の平均は33.14mm、平均重量は16.55 gである。中には土36のように極めて小型（重量6.8 g）のものも含まれる。無文の個体もあるが、文様からみて中期加曽利E式の土器の再利用のものが大半であると考えられる。

なお、法量などは一覧表（第4表）のとおりである。

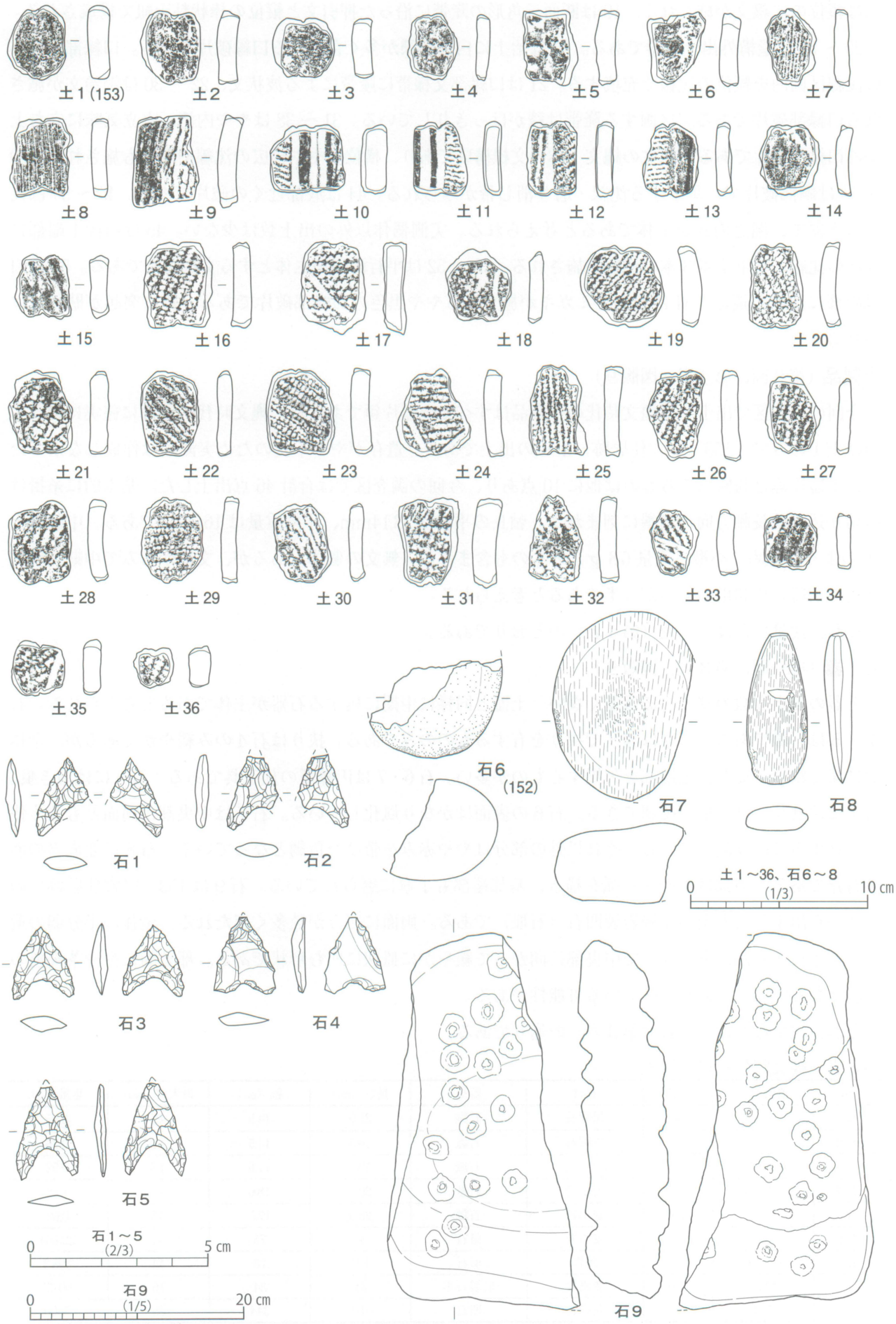
石　器（第9図、第3表、図版9）

土器の出土点数の割に石器は多くない。土器と同様に中期に属する石器が主体であると考えられる。石1～5は石鏃である。形態は無茎で抉りを有するもののみである。抉りは石4のみ緩やかであるが、全体的に深く鋭い。また、先端部を欠損するものが多い。石6・7は円礫製の加工具である。石6には敲き痕、石7には磨りと敲打痕が確認できる。石6の表面はかなり風化している。石7は中央部が両面とも強く使用され平らに磨り減っている。それ以外の部分はやや赤みを帯びた色調となっている。石8は変成岩の磨製石斧である。刃部は緩やかな弧を描き、基部端部も丁寧に磨られている。石9は153（竪穴住居跡）の床面から出土した大型の花崗岩製凹石（石皿）である。両面に凹みが数多く穿たれる。全体の半分弱の遺存と考えられるが、全体として中央部に向かって緩やかに皿状に凹む形状である。部分的にやや茶褐色の色調となっており、火を受けている可能性がある。

なお、法量などは一覧表（第3表）の通りである。

第3表　縄文時代石器計測表

No.	遺構番号	遺物No.	石材	器種	長さ（mm）	幅（mm）	最大厚（mm）	重量（g）
石1	101	36	黒曜石	石鏃	21.0	14.5	4.5	0.85
石2	128	14	黒曜石	石鏃	19.5	14.5	4.0	0.76
石3	C18-01	46	チャート	石鏃	19.0	17.0	4.5	0.92
石4	C18-01	50	安山岩	石鏃	20.5	18.0	3.5	1.28
石5	144-1	59	安山岩	石鏃	26.0	17.5	3.5	0.92
石6	152	50	安山岩	敲石	54	75	54	225.64
石7	C18-00	14	砂岩	磨石	101	78	44	498.3
石8	144-1	129	変成岩	磨製石斧	81	34	16	60.42
石9	153	35	花崗岩	凹石	183	344	85	7800



第9図　縄文時代出土遺物（3）

第４表　縄文時代土製品計測表

No.	出土位置	遺物No.	種類	最大長（mm）	最大幅（mm）	最大厚（mm）	重量（g）	備考
1	153	29	土器片錘	40.00	32.00	12.00	17.20	遺構帰属
2	C18-01	60	土器片錘	38.10	34.00	11.30	12.30	
3	C18-01	60	土器片錘	33.30	34.80	10.30	14.75	
4	101	68	土器片錘	35.00	28.80	6.70	8.28	
5	101	69	土器片錘	41.60	29.90	10.00	15.53	
6	101	34	土器片錘	36.10	32.20	9.80	12.84	
7	129	4	土器片錘	39.80	28.00	7.70	10.11	
8	C18-01	60	土器片錘	42.00	33.30	8.80	16.08	
9	C18-01	38	土器片錘	47.50	36.40	10.10	24.42	
10	C18-01	18	土器片錘	35.50	42.40	12.10	24.36	
11	C18-01	60	土器片錘	38.30	31.10	6.50	12.41	
12	C18-01	60	土器片錘	39.30	26.70	9.60	14.17	
13	C18-01	60	土器片錘	39.30	32.00	6.50	11.36	
14	101	68	土器片錘	37.40	33.90	8.50	13.08	
15	101	69	土器片錘	35.60	31.00	7.20	12.53	
16	C18-01	60	土器片錘	47.40	39.00	9.90	26.32	
17	B18-41	4	土器片錘	48.60	35.70	11.30	23.42	
18	C18-01	60	土器片錘	38.50	37.40	8.10	16.17	
19	C18-01	28	土器片錘	43.90	46.60	8.80	21.36	
20	129	2	土器片錘	44.70	30.00	9.60	17.76	
21	C18-01	60	土器片錘	44.80	35.30	10.50	22.84	
22	C18-01	60	土器片錘	45.30	32.50	8.80	16.61	
23	C18-01	60	土器片錘	44.50	38.50	10.90	28.35	
24	C18-01	4	土器片錘	45.70	41.70	9.90	20.81	
25	C18-00	14	土器片錘	48.00	31.70	10.80	19.10	
26	B18-41	4	土器片錘	48.50	32.00	8.80	17.26	
27	102	171	土器片錘	40.00	31.50	7.30	11.22	
28	B18-40	10	土器片錘	41.20	35.50	9.10	19.22	
29	102	20	土器片錘	44.70	34.50	8.30	17.13	
30	129	2	土器片錘	42.00	30.80	9.00	15.42	
31	121	17	土器片錘	46.00	34.10	14.50	29.62	
32	121	17	土器片錘	44.50	30.30	9.90	15.93	
33	129	3	土器片錘	34.50	26.70	9.70	10.48	
34	101	27	土器片錘	30.00	31.50	8.50	9.96	
35	C18-01	60	土器片錘	28.20	30.00	9.90	10.67	
36	C18-01	60	土器片錘	21.00	21.30	12.60	6.80	
37	表採	1	土器片錘	40.00	33.90	9.60	18.39	
38	C18-01	60	土器片錘	47.15	39.40	16.00	30.91	
39	101	22	土器片錘	31.20	35.80	8.00	13.83	
40	141	103	土器片錘	41.50	32.70	9.00	17.32	
41	101	69	土器片錘	33.80	22.20	6.00	5.79	
42	B18-41	4	土器片錘	33.90	24.60	8.60	9.75	
43	B18-40	10	土器片錘	38.90	34.00	11.20	14.77	
44	C18-01	3	土器片錘	44.40	33.10	9.40	15.06	
45	B18-40	10	土器片錘	36.85	29.70	12.20	17.55	
46	表採	1	土器片錘	22.40	20.60	10.40	5.12	

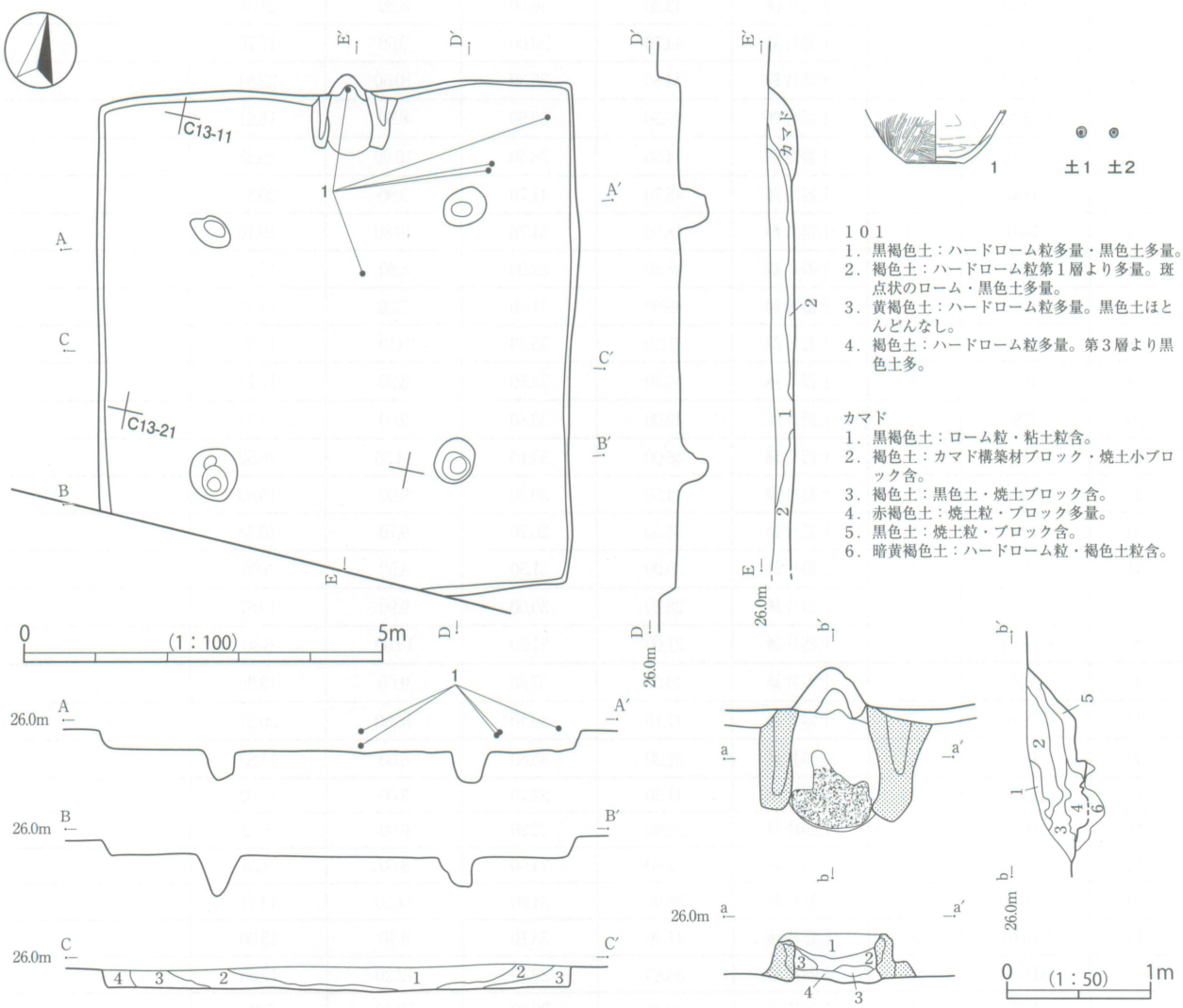
第２節　古墳時代以降

１　遺　構

１０１（第10図、図版２）

調査区西側のC13-11周辺に位置する。北側にカマドが付設され、主軸はN－11°－Wである。南西コーナーは調査区外となる。平面形は４辺が直線的な方形で、隅もしっかりとした直角である。規模は主軸長6.5 m、短軸長6.3 mである。今回の調査区の中では最大規模の竪穴住居跡である。掘り込みは確認面から0.33 mである。覆土はレンズ状で自然堆積と考えられる。カマドは北側壁面を掘り込み、奥壁は底面からなだらかに立ち上がる。カマド袖部は遺存し、火焼部は焼土が堆積する。カマド火焼部の掘り方は根の撹乱の可能性もあるが深く、凹凸している。ピットは主柱穴が４基しっかりと掘り込まれる。ピット覆土は柱抜き取り後埋め戻されたような堆積部分がある。貯蔵穴は確認されなかったが、存在するとしたら調査区外の南西コーナーである。ピット覆土に柱痕跡の可能性のある黒褐色土が確認できた。なお、壁周溝は巡らない。

遺物は全体的に破片で出土し、特にカマド周辺と住居北東側に多いが、実測可能な個体は甕の底部破片のみであった。土器類の他には土製の丸玉が２点出土している。

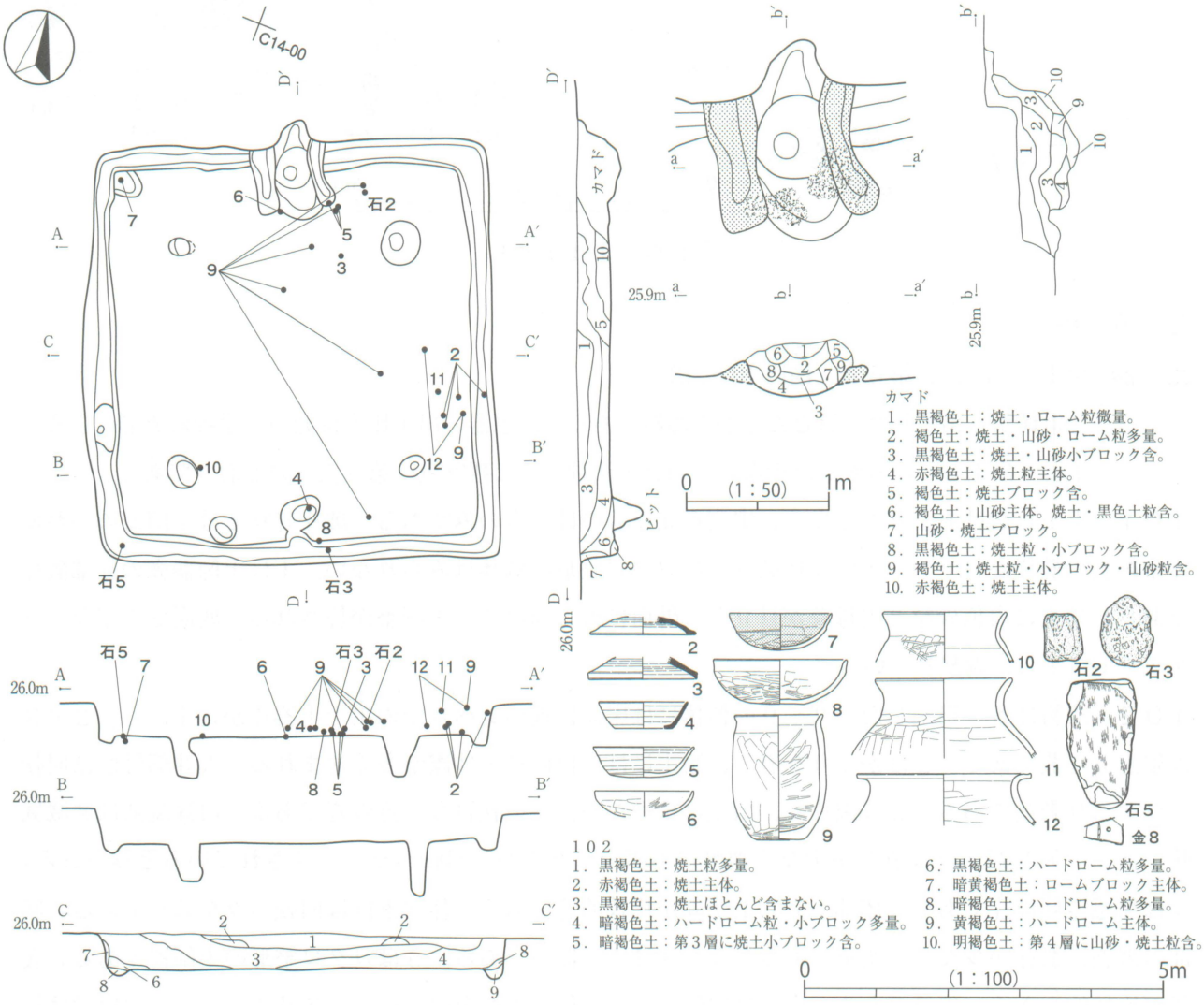


第10図　１０１

１０２（第11図、図版２）

調査区西側のC14-10周辺、101住居の東側に位置する。北側にカマドが付設され、主軸はN－22°－Wである。平面形は正方形で１辺5.0 m、掘り込みは確認面から0.47 mである。カマド奥壁は比較的急で、上部でなだらかとなる。カマド袖部は遺存し、天井部が崩落した状態が確認できた。ピットは主柱穴が４基しっかりと掘り込まれ、カマドの対面壁寄りからは入り口ピットが確認できる。貯蔵穴はなく、壁周溝は全周する。ピット覆土に柱痕跡の可能性のある黒褐色土が明瞭に確認できる。

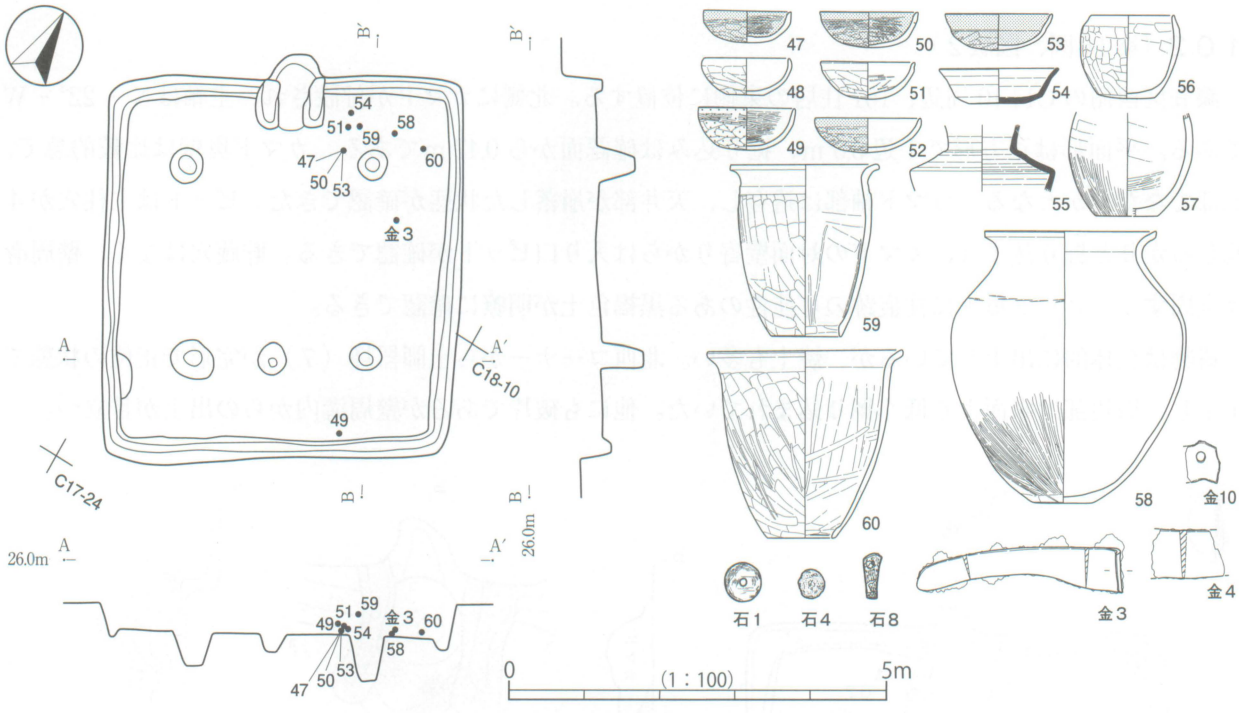
遺物は全体的に出土しているが、焼土も多い。北西コーナーから土師器坏（７）が完形で正位の状態で出土し、周辺部は床面より低く掘り込まれていた。他にも破片であるが壁周溝内からの出土が目立つ。



第11図　１０２

１４４－１（第12図、図版３）

調査区東側C17-14周辺に位置する。南西コーナー部分で150（土坑）と接する。北側にカマドが付設され、主軸はN－31°－Wである。平面形は正方形で、１辺4.1 mと小型である。掘り込みは確認面から0.74 mである。カマドは北側壁面を掘り込む。カマド右袖側を中心に完形に近い土器（甑・坏）が土圧で一部つぶれた状態で出土した。ピットは主柱穴が４基しっかりと掘り込まれ、南側主柱穴間にやや浅いピットが配置される。貯蔵穴はなく、壁周溝は全周する。



第12図　１４４－１

2　遺　物

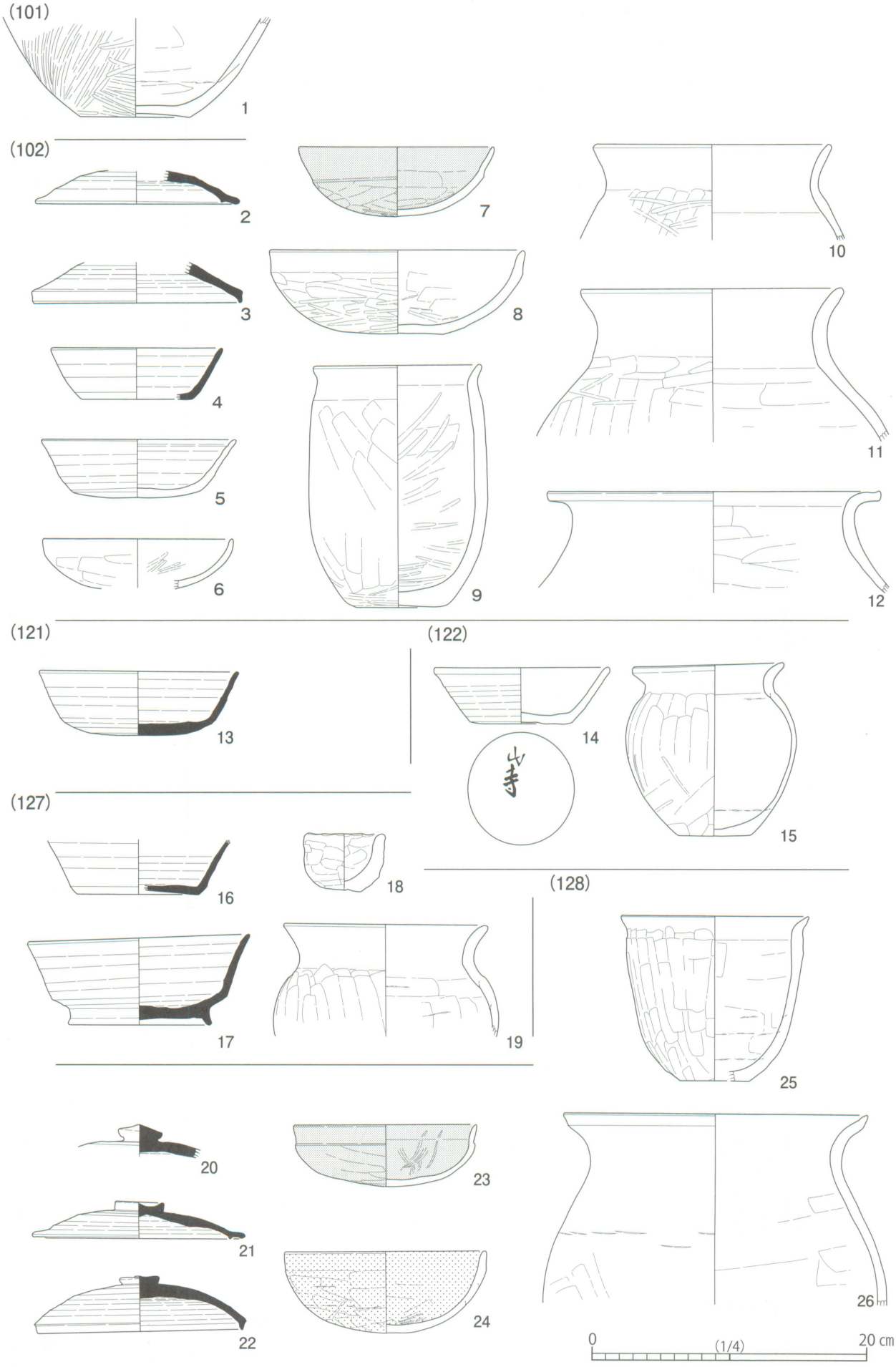
土　器（第13～15図、第5表、図版10～12）

土器は各遺構から出土した。ほとんどが土師器であり、須恵器の出土比率は低い。手捏ね成形によるミニチュア土器も出土しているが数は少ない。調整・法量などは観察表（第5表）のとおりである。

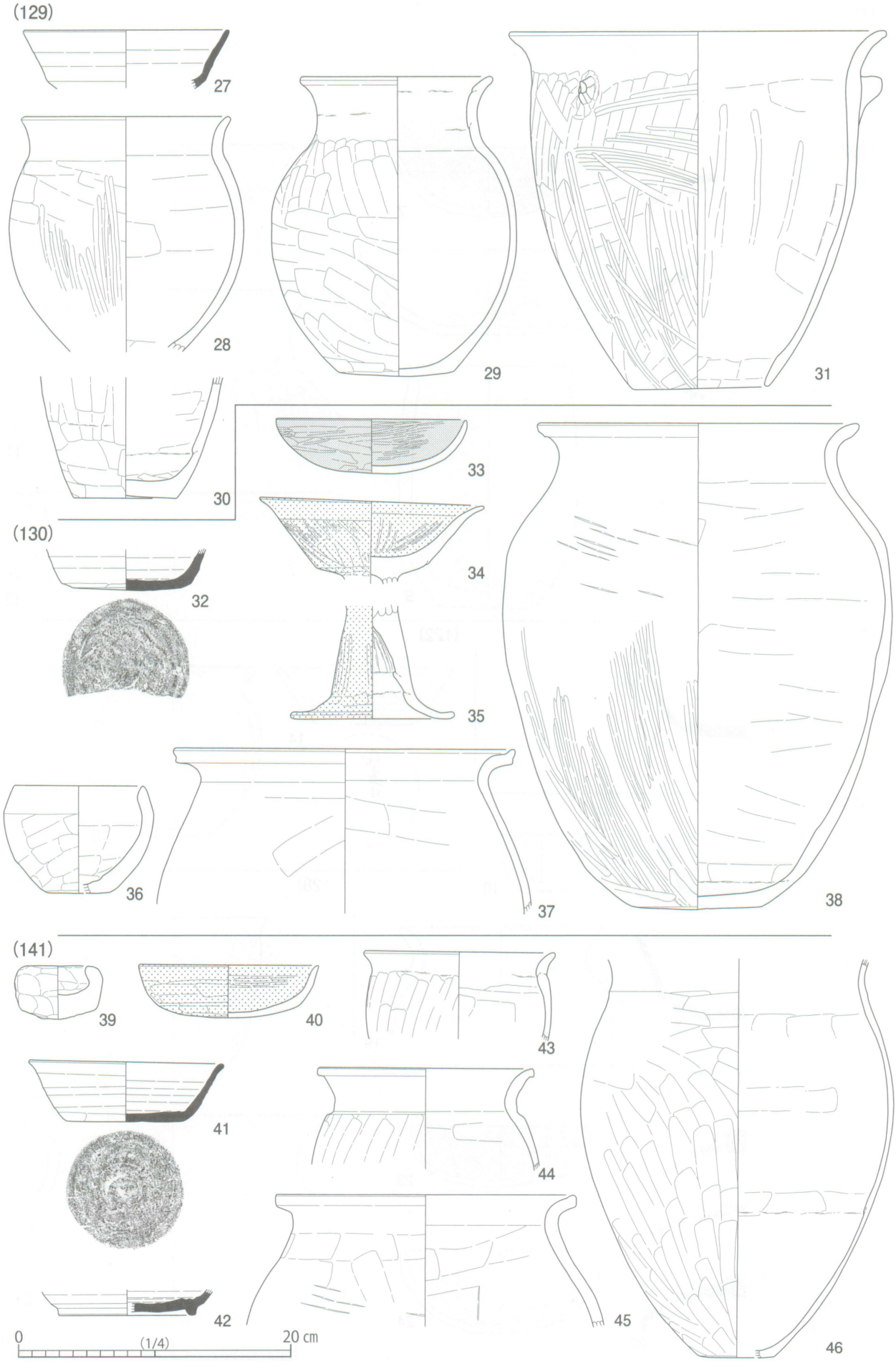
１０１：出土点数はあまり多くなく、実測可能なものは1点のみである。破片資料では土師器のいわゆる常総甕の破片が目立つ。土師器坏破片にはロクロ整形の個体はみられない。1は土師器甕の底部破片である。胎土に白色砂粒と雲母粒が目立ち、外面に縦方向のミガキ調整が施される。底面は丁寧なヘラケズリで、平らに調整している。

１０２：遺物は多く出土した。2～9の個体には床面に近いレベルでの出土土器片が含まれる。2・3は須恵器坏蓋である。2はかえりを有し、胎土には白色砂粒・砂礫が多く含まれる。天井部外面は回転ヘラケズリ調整である。3は破片で、胎土は精緻だが、やや軟質な質感の蓋である。口縁端部は摩滅気味である。天井部上位は遺存が少なく調整が不明瞭であるが、回転ヘラケズリされているとみられる。4は須恵器坏破片である。体部の立ち上がりが比較的急である。体部下位は回転ヘラケズリである。底部の調整は遺存が少なく不明瞭である。5～8は土師器坏である。5はロクロ整形の土師器である。底径が比較的大きく、硬質である。底部は回転ヘラ切り後、周縁を回転ヘラケズリされる。6の口縁は短く立ち上がるが、稜は弱い。外面のヘラケズリ痕が明瞭である。7はほぼ完形の黒色処理された坏である。外面のヘラケズリ調整痕が明瞭である。口縁端部は全体的に摩滅し、凹凸がある。8はかなり大型の坏で底部は平底を意識している。9は土師器のくびれのない小型の甕である。接点はないが図面上で器形を復元した。器厚があり、内面が黒色である。火を受け特に外面が荒れている。10～12は土師器甕の口縁である。いずれも破片であるが、整形はしっかりと丁寧である。

１２１：出土点数は少なく、実測個体も1点のみである。13は須恵器坏である。覆土下層からの出土である。胎土に多量の白色砂礫が含まれる。底面は回転ヘラケズリである。底部内面はなめらかであるが、他の器



第13図　古墳時代以降出土遺物（1）



第14図　古墳時代以降出土遺物（2）

面はざらつく。

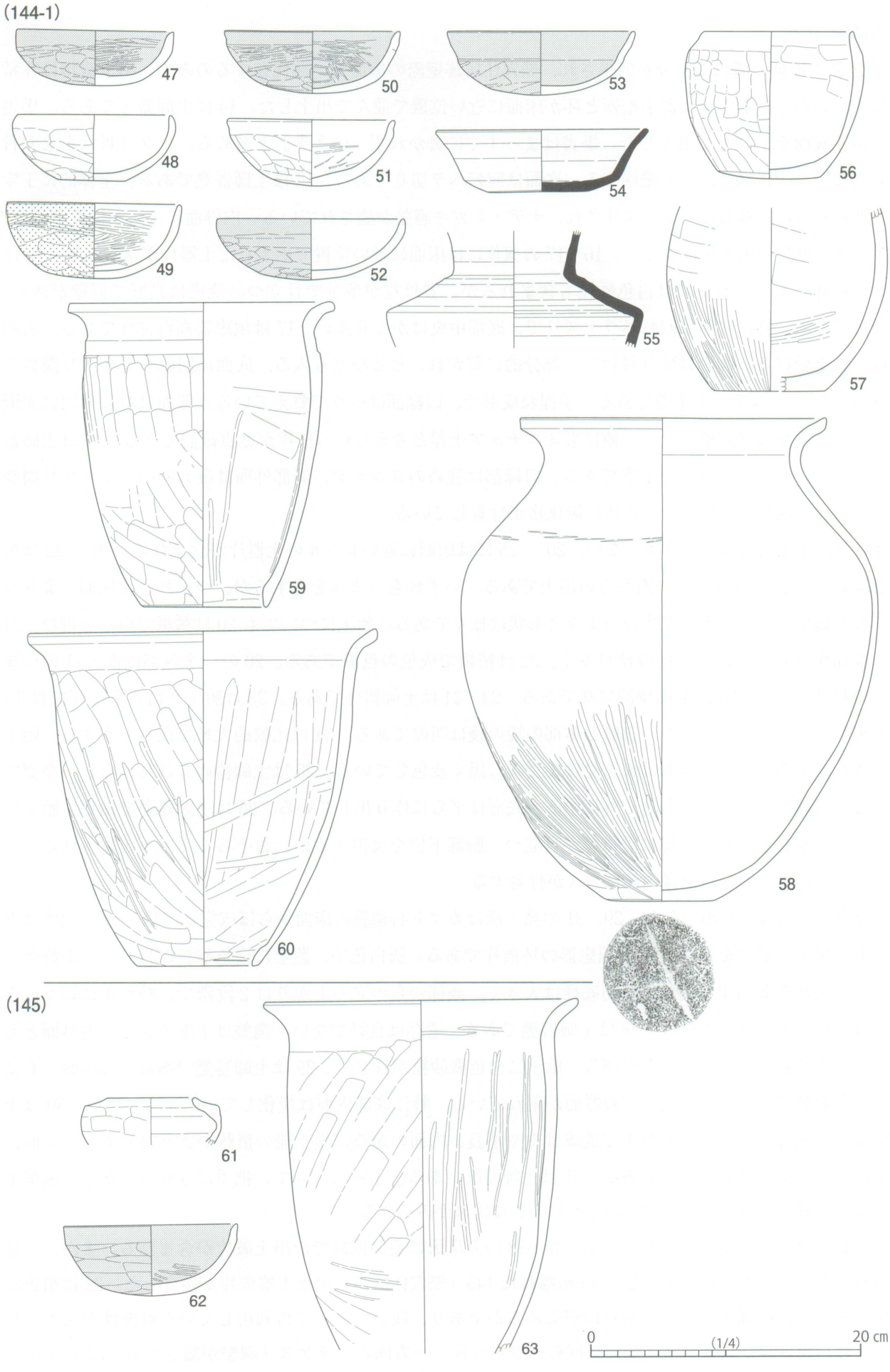
１２２：後世の溝に大部分が削平され、竪穴住居跡壁際の床面が一部残存するのみで、出土遺物は非常に少ないが、完形の土師器小型壺と坏が床面に近い位置で並んで出土した。14 は土師器坏である。墨書のある底面を上にして出土した。墨書はまっすぐに書かれず「山？寺」と読める。ロクロ目はあまり目立たない。口縁端部がやや肥厚する。底面は回転ヘラ切りである。15 は土師器甕である。全体的に丁寧な整形である。外面はヘラケズリされ、ナデ・ミガキ調整が施されている。内外面にススが付着する。

１２７：遺物の出土量は少ない。16・17 の個体には床面に近い位置で出土した土器片が含まれる。16 は須恵器坏である。胎土には白色砂粒も含まれるが、雲母粒が多量で目立つ。焼成は良好で器壁が薄く、硬質である。特に底面は回転ヘラケズリで、底部中央はかなり薄い。17 は須恵器高台付坏である。色調は白みを帯びる。高台は貼り付けで、部分的に剝がれ、ヒビなども入る。底面は回転ヘラケズリ調整である。18 はミニチュア土器である。手捏ね成形で、口縁部はヘラで整えている。器面は特に外面に光沢がある。底面は無調整に近い。他にもミニチュア土器と考えられる破片が２点確認できる。19 は土師器甕である。全体的に整形が丁寧である。口縁部は強めのヨコナデ、胴部外面は縦方向のヘラケズリ調整である。口縁部内面にはタール状に炭化物が付着している。

１２８：出土遺物はあまり多くない。20 ～ 25 には床面に近いレベルの土器片が含まれる。20 ～ 22 は須恵器蓋である。20 はカマド内からの出土である。いずれもつまみを有するが、つぶれた宝珠形、よりつぶれた扁平つまみ、ほぼ環状のつまみと形状は様々である。胎土についても 20 は精緻で白みを帯び、21 は器面がざらつくほど白色砂粒が多く、22 は精緻で灰色の色調である。20 のつまみ部内面・21 のつまみの端部・22 の口縁端部は摩滅気味である。23・24 は土師器坏である。23 は胎土が白みを帯びており、赤褐色スコリア粒が目立つ。口縁と体部の境の稜は明瞭である。24 は比較的大型で深さも有する。胎土自体も赤く発色する。器面は火を受けまだらに黒く変色している。25 は土師器のくびれのない小型甕である。口縁の立ち上がりも短く外反する。底面は平らに作り出している。26 は土師器甕である。胎土に白色砂粒が含まれるが、特に雲母粒が目立つ。胴部下位を欠損するが、おそらくミガキの施される、いわゆる常総甕である。口縁内部にススが付着する。

１２９：遺物は多く出土した。29、31 の甕と甑はカマド右袖脇の床面からほぼ完形で出土した。28 はカマド内出土土器片を含む。27 は須恵器の坏破片である。灰白色で、胎土に白色砂粒が目立つのが特徴である。底面を欠損するが、比較的底径は大きく、底部からの立ち上がりは２段階で、緩やかに短く立ち上げた後、上に立ち上げる。28 は土師器甕である。遺存は良好でない。調整は丁寧である。内外面とも使用による被熱のため赤みを帯びる。胎土に白色微砂粒が目立つ。29 は土師器甕である。外内面ともに丁寧な調整であるが、被熱のため器面が荒れている。特に底部内面は炭化しているように黒い。30 は土師器甕の底部である。やや厚手で焼成はやや不良、内面の調整は粘土紐の痕跡があり雑である。底面は丁寧にヘラケズリし、平らである。31 は土師器甑である。丁寧な作りで、把手は３か所である。胴部下端はやや雑な整形である。内外面ともに大きな黒斑がみられる。

１３０：遺物はあまり多くない。35・37・38 のみ床面に近い位置での出土破片が含まれる。また、一括資料であるが、本住居出土土器と 15 m離れた 145（竪穴住居跡）出土土器破片が接合した。32 は須恵器坏である。口縁部を欠くが、割れ口がなめらかであり、浅い坏として再利用していた可能性がある。胎土には白色砂粒が含まれる。底面は回転ヘラ切り後、一方向のヘラケズリ調整が施される。33 は土師器

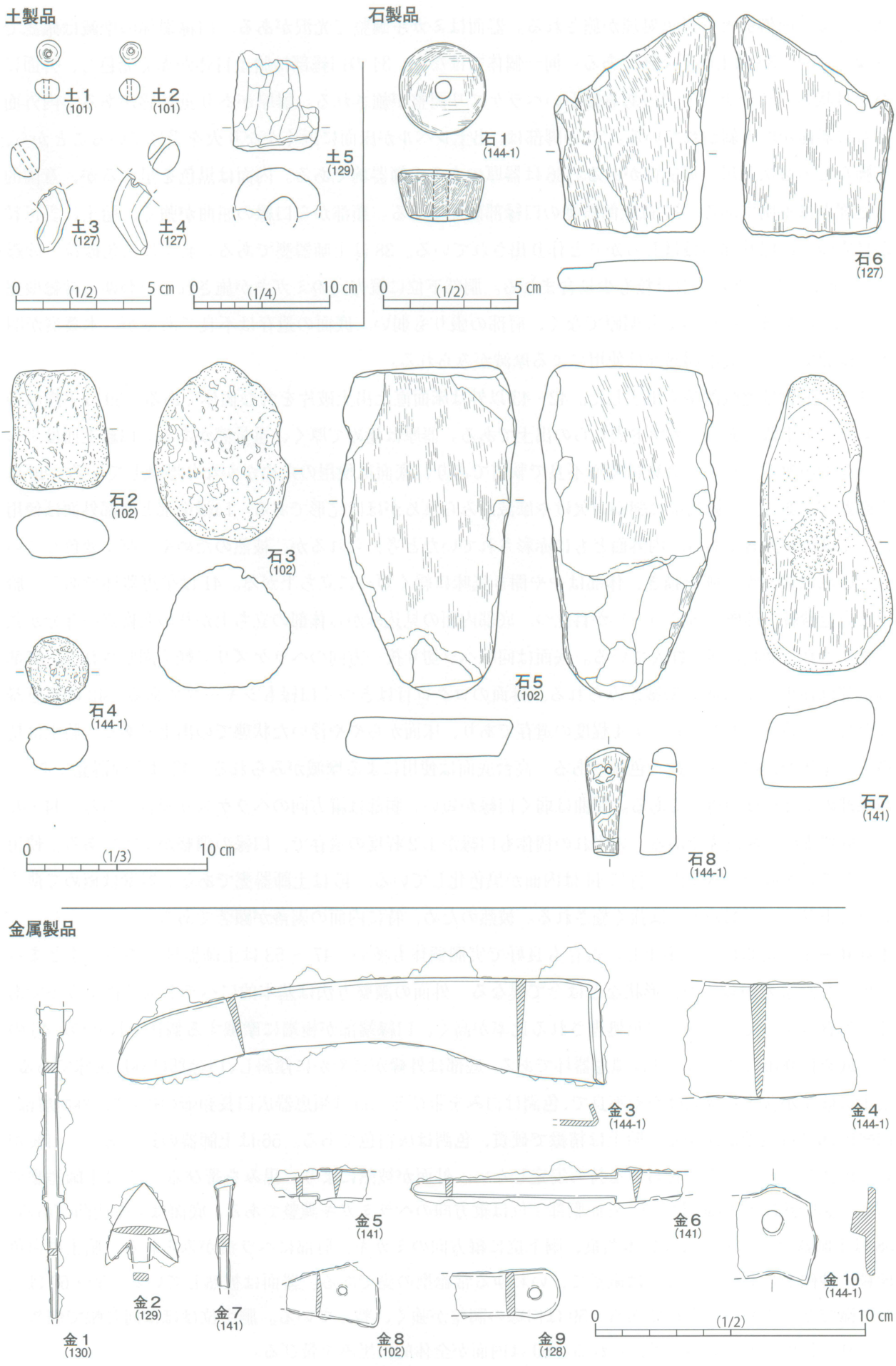


第15図　古墳時代以降出土遺物（3）

坏である。内外面とも黒色処理が施される。器面はミガキ調整で光沢がある。口縁端部の摩滅は確認できない。34・35は土師器高杯である。同一個体ではない。34の口縁部は胎土自体が赤く発色し、外面にハケ目状のヘラナデ、光沢のある細かいヘラケズリ調整が施される。器厚があり重量感がある。内外面ともに器面が所々剝がれている。35の脚部は、出土レベルが床面に近くかなり火を受けていることから、支脚などの2次利用の可能性がある。36は器厚のある土師器埦である。内面は黒色を呈するが、意図的な処理かは不明である。37は土師器甕の口縁部破片である。頸部から口縁の屈曲が強く、胎土に雲母粒が目立つ。口縁端部の稜はしっかりと作り出されている。38は土師器甕である。胎土に白色砂粒・砂礫（φ2mm）が目立ち、雲母粒も少量含まれる。胴部下位に縦方向のミガキが施されるいわゆる常総型甕である。口縁部の稜はあまり明瞭でなく、肩部の張りも弱い。底面の遺存は不良であるが、木葉痕が明瞭に確認できる。底部周縁部は使用による摩滅がみられる。

141：遺物は比較的多く出土した。42・43以外は床面直上出土破片を含む個体である。39は手捏ねのミニチュア土器である。カマド内からの出土である。器厚は極めて厚く、重量感がある。口縁上面は平らにヘラで調整している。焼成はやや不良で軟質であり、底面は使用のためかかなり摩滅している。40は土師器坏である。口縁端部に細かい欠けや摩滅がみられるがほぼ完形である。口縁端部と底部外面は使用による摩滅が顕著である。内外面ともに赤彩されていたと考えられるが、被熱のためやや暗く変色している。底部は緩やかに弧を描き、体部はやや開き気味に緩く短めに立ち上がる。41は須恵器坏である。胎土に白色砂粒・砂礫（φ3mm）が目立つ。底部内面の見込みから体部の立ち上がりの変換点の部分が強く整形され、溝状に浅く窪んでいる。底面は回転ヘラ切り後一方向のヘラケズリで軽く調整される。底部外縁部は使用による弱い摩滅がみられる。外面のロクロ目はきつく口縁もシャープである。42は須恵器高台付坏の破片である。底部1/4程度の遺存であり、床面からやや浮いた状態での出土である。胎土は精緻で、全体的に白みを帯びた色調である。高台底面は使用による摩滅がみられる。43は土師器甕である。口縁部の1/2程度の遺存である。屈曲は弱く口縁が短い。胴部は縦方向のヘラケズリ調整である。44・45は土師器甕の口縁破片である。いずれの個体も口縁が1/2程度の遺存で、口縁の調整が丁寧である。使用による被熱が確認できるが、特に44は内面が黒色化している。46は土師器甕である。器壁は極めて薄く底径も小さい。頸部のナデは強く施される。被熱のため、特に内面の剥落が顕著である。

144－1：遺物は多く出土し、遺存も良好で実測個体も多い。47～53は土師器坏である。まとまって出土したものが多いが、形状などは全て異なる。外面の調整方法は基本的にヘラケズリ後ミガキである。遺存は不良であるが、黒色処理される比率が高く、口縁端部が極端に摩滅する個体が目立つ。48のみ平底を作り出している。54は須恵器坏である。底部は外縁が緩やかに傾斜し、口縁部は外反気味である。胎土に砂粒が含まれ焼成はやや不良で、色調は白みを帯びる。55は須恵器広口長頸壺の破片で、外面肩部、口縁内部に自然釉がかかる。胎土は精緻で硬質、色調は灰白色である。56は土師器の鉢である。口縁が短く内傾し、底面がやや膨らみを持ち安定しない。外面が被熱により、黒みを帯びる。57は土師器甕である。器厚があり、内面は黒い。外面胴部下位は縦方向のヘラミガキ調整である。底面はやや凹凸がある。58は土師器甕である。底面に木葉痕、胴下位に縦方向のミガキ、肩部にヘラ痕がみられる。胎土に白色砂粒・砂礫が目立つ。雲母粒は微量で、いわゆる常総型の甕である。器面は被熱している。59・60は土師器甑でどちらもほぼ完形である。59は口縁の調整が強く、整っている。胴中位はほぼ同じ幅で剝離しており、使用による痕跡と考えられる。60は内面が全体的に黒みを帯びる。



第16図　古墳時代以降出土遺物（4）

１４５：遺物の出土量は少ない。62・63には床面に近い位置での出土破片が含まれる。61は土師器で、口縁が大きく内傾する特殊な形状の坏である。口縁周辺のみの破片のため全体形状は判然としない。整形は全体的に丁寧である。62は土師器坏である。外面はヘラケズリの跡が明瞭である。ほぼ完形であるが口縁部を一部欠く。欠損面が摩滅している。内外面ともに黒色処理されていたと考えられるが、遺存は不良である。63は底部を欠損するが、おそらく土師器の甑と考えられる。特に内面下位の器面の剝がれが著しい。口縁部など整形が丁寧で、外面ヘラケズリ痕が明瞭である。

土製品・石製品（第16図、第6表、図版12）

土製品は非常に少ない。土１・２は丸玉で101（竪穴住居跡）から出土した。色調はやや黒みを帯びた茶褐色で、光沢があり硬質である。一見石製品のようである。ほぼ床面直上から出土した。土３・４は勾玉で127（竪穴住居跡）から出土した。孔の部分で割れ先端部が欠損する。穿孔は２方向である。土４は床面に近い位置での出土である。土５は羽口状の土製品で、129（竪穴住居跡）から出土した。滓などの付着はみられないが、かなり焼き締まっており硬質である。外面は雑なナデ調整である。他に、カマドが付設される住居跡から遺存は不良であるが、支脚が破片で複数出土した。

石製品などでは、軽石･砥石･石製紡錘車が出土しているが、土製品と同様に住居軒数の割に少量である。102（竪穴住居跡）からは軽石と凝灰岩製の砥石が出土した。石２の軽石は色調が白みを帯び、石３は黒みを帯びる。石５の砥石は板状で、壁際から出土している。破面以外は磨られている。127（竪穴住居跡）からは石６の凝灰岩製板状砥石が出土した。２点が離れて出土したものが接合した。上下面はかなり磨られてなめらかである。側面は平らではないが、摩滅している。141（竪穴住居跡）からは石７の砂岩製砥石が出土した。縄文時代石器の可能性もあったが、床面に近い覆土下層からの出土のため住居に伴うものとした。実測図上面中央部と上端・下端に敲痕、そのほかの部分は磨られている。実測図裏面はやや黒みを帯びており、火を受けている可能性がある。144-1（竪穴住居跡）からは紡錘車、凝灰岩製砥石、軽石が出土した。土器類も豊富に出土したこの住居からは石製品のほか金属製品も多い。石１の紡錘車は滑石製（蛇紋岩）で、各面がやや膨らみを持つ。擦痕が明瞭にみられ、側面はわずかに細かい面を残す。石４の軽石は小型で、上下面中心部が凹む。石８の砥石は凝灰岩製で、孔があり全面擦られている。

なお、法量などは一覧表（第６表）のとおりである。

金属製品（第16図、第７表、図版12）

金属製品は遺構数の割に数は少ない。実測していないものを含めても16点が確認できるのみである。出土遺構は竪穴住居跡からが多く、中でも土器類の出土が多い竪穴住居跡に伴う傾向にある。

金１・２は鉄鏃である。金１は鏃身部と茎部先端を欠損する。鏃身形は不明であるが、両関をもつ長頸鏃で棘篦被を有する。金２は三角形式の鉄鏃である。腸抉は直線的で鋭い。頸部以下を欠損する。金３は曲刃鎌で刃部が摩耗し、かなり使い込まれている。３分割になっているが接合し、遺存は良好である。金４も形状として鎌の可能性があるが、錆膨れのため刃部なのかどうか不明瞭で確定できない。金５・６は刀子の破片である。金７は鉄釘で、断面は方形である。金８は遺存が悪い不明鉄製品である。孔があり、穂積具などの一部の可能性があるが、刃部が明瞭でなく特定できない。金９にも孔があり、刃部がないことから鉄製工具の柄の部分の可能性が高い。金10は不明鉄製品で、刃はない。なお、実測はしていないが、鉄滓（金11・12）が出土している。鍛冶滓の一部と考えられる。

なお、法量などは一覧表（第７表）のとおりである。

第５表　古墳時代以降土器観察表

（　）推定　＜　＞現存長

№	遺構№	種類	器種	法量（cm）		遺存度	胎土	色調（色処理）・焼成		技法		備考
1	101	土師器	甕	口径	-	胴部下半～底部 30%	白色砂粒・雲母粒	内面	にぶい黄褐（10YR5/3）	内面	ヘラナデ・ミガキ	内面：粘土紐剝がれ痕。
				底径	8.0			外面	にぶい赤褐（5YR5/4）	外面	ミガキ	
				器高	<6.9>			焼成	良好	底外面	ヘラミガキ・ナデ	
2	102	須恵器	蓋	口径	(14.5)	40%	白色砂粒多量	内面	黄灰（2.5Y6/1）	内面	ロクロナデ	器面がざらつく。
				底径	-			外面	黄灰（2.5Y6/1）	外面	回転ヘラケズリ・ロクロナデ	
				器高	<2.3>			焼成	良好	底外面	－	
3	102	須恵器	蓋	口径	(15.0)	30%	精緻	内面	黄灰（2.5Y6/1）	内面	ロクロナデ	器面全体的に摩滅。
				底径	-			外面	黄灰（2.5Y6/1）	外面	回転ヘラケズリ・ロクロナデ	
				器高	<2.9>			焼成	やや不良	底外面	－	
4	102	須恵器	坏	口径	(12.5)	25%	微砂粒	内面	灰黄（2.5Y6/2）	内面	ロクロナデ	
				底径	(8.0)			外面	灰黄（2.5Y6/2）	外面	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	
				器高	3.5			焼成	やや不良	底外面	手持ヘラケズリ？	
5	102	土師器	坏	口径	14.2	70%	白色・各種砂粒多い	内面	明赤褐（5YR5/6）	内面	ロクロナデ	須恵質。
				底径	9.2			外面	にぶい赤褐（5YR5/4）	外面	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	
				器高	4.1			焼成	良好	底外面	ヘラ切り後ナデ	
6	102	土師器	坏	口径	(13.8)	30%	砂粒	内面	にぶい橙（7.5YR6/4）	内面	ミガキ	
				底径	丸底			外面	にぶい褐（7.5YR6/3）	外面	ヨコナデ・ヘラケズリ	
				器高	<3.4>			焼成	良好	底外面	－	
7	102	土師器	坏	口径	14.3	85%	白色微砂粒	内面	にぶい赤褐（5YR4/3）	内面	ヘラナデ	
				底径	丸底			外面	黒（5YR1.7/1）	外面	ヨコナデ・ヘラケズリ後ミガキ	
				器高	4.9			焼成	良好	底外面	－	
8	102	土師器	坏	口径	(18.5)	45%	砂粒	内面	明赤褐（2.5YR5/6）	内面	ナデ・ミガキミガキ	胎土自体が赤く発色。
				底径	(5.9)			外面	明赤褐（2.5YR5/6）	外面	ヨコナデ・ヘラケズリ後ミガキ	
				器高	5.8			焼成	良好	底外面	－	
9	102	土師器	小型甕	口径	(12.0)	35%	微砂粒	内面	黒（5YR1.7/1）	内面	ヨコナデ・ヘラケズリ後ミガキ	被熱。
				底径	7.0			外面	にぶい赤褐（5YR5/4）	外面	ヨコナデ・ヘラケズリ・ミガキ	
				器高	(16.9)			焼成	良好	底外面	－	
10	102	土師器	甕	口径	(17.0)	口縁～胴部上半 20%	微砂粒	内面	にぶい赤褐（5YR4/4）	内面	ヨコナデ・ミガキ	全体的に器面に光沢。
				底径	-			外面	にぶい赤褐（5YR4/4）	外面	ヨコナデ・ヘラケズリ・ミガキ	
				器高	<6.6>			焼成	良好	底外面	－	
11	102	土師器	甕	口径	(19.0)	口縁～胴部上半 20%	白色微砂粒	内面	明赤褐（2.5YR5/6）	内面	ヨコナデ・ヘラナデ	胎土自体が赤く発色。
				底径	-			外面	にぶい赤褐（2.5YR5/4）	外面	ヨコナデ・ヘラケズリ・ミガキ	
				器高	<10.6>			焼成	良好	底外面	ヨコナデ・ヘラナデ	
12	102	土師器	甕	口径	(24.0)	破片	白色微砂粒・雲母粒	内面	にぶい橙（7.5YR6/4）	内面	ヘラナデ	
				底径	-			外面	にぶい橙（7.5YR6/4）	外面	ナデ・ミガキ	
				器高	<7.0>			焼成	良好	底外面	－	
13	121	須恵器	坏	口径	(14.5)	40%	白色砂粒多	内面	灰（10Y5/1）	内面	ロクロナデ	
				底径	(7.2)			外面	灰（10Y5/1）	外面	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	
				器高	4.5			焼成	良好	底外面	－	
14	122	土師器	坏	口径	12.8	100%	微砂粒・赤色スコリア粒	内面	橙（7.5YR1/6）	内面	ナデ	墨書（山？寺）。
				底径	7.6			外面	橙（7.5YR1/6）	外面	ロクロナデ	
				器高	3.9			焼成	良好	底外面	回転ヘラ切り	
15	122	土師器	小型甕	口径	10.8	95% ほぼ完形	微砂粒	内面	明赤褐（2.5YR5/6）	内面	ナデ	
				底径	5.3			外面	にぶい赤褐（5YR5/3）	外面	ヨコナデ・ヘラケズリ後ミガキ	
				器高	11.9			焼成	良好	底外面	ヘラケズリ後ナデ	
16	127	須恵器	坏	口径	-	体～底部 30%	雲母多	内面	黄灰（2.5Y5/1）	内面	ロクロナデ	
				底径	(9.0)			外面	黄灰（2.5Y5/1）	外面	ロクロナデ	
				器高	<3.9>			焼成	良好	底外面	回転ヘラケズリ	
17	127	須恵器	高台付坏	口径	16.2	70%	白色微砂粒	内面	灰白（5Y7/2）	内面	ロクロナデ	
				底径	10.4			外面	灰白（5Y7/1）	外面	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	
				器高	6.05			焼成	良好	底外面	回転ヘラケズリ	
18	127	ミニチュア土器		口径	6.0	80%	白色微砂粒	内面	にぶい褐（7.5YR5/3）	内面	ヘラナデ	手捏土器。被熱。
				底径	丸底			外面	にぶい褐（7.5YR5/3）	外面	ヘラナデ・ミガキ	
				器高	4.0			焼成	良好	底外面	－	
19	127	土師器	甕	口径	14.8	口縁～胴部上半 50%	微砂粒	内面	にぶい黄褐（10YR5/3）	内面	ヨコナデ・ヘラナデ	口縁内部：炭化物付着。
				底径	-			外面	にぶい褐（7.5YR5/3）	外面	ヨコナデ・ヘラケズリ	
				器高	<7.8>			焼成	良好	底外面	－	
20	128	須恵器	蓋	摘径	3.2	60%	精緻	内面	灰白（7.5Y7/2）	内面	ロクロナデ	内面：磨滅気味。
				底径	-			外面	灰オリーブ（7.5Y6/2）	外面	ヘラケズリ	
				器高	<2.2>			焼成	良好	底外面	－	
21	128	須恵器	蓋	口径	15.6	95%	白色砂粒多	内面	灰（7.5Y6/1）	内面	ロクロナデ	内部セピア色，摘み摩滅気味。
				摘径	3.6			外面	灰（7.5Y6/1）	外面	回転ヘラケズリ・ロクロナデ	
				器高	2.65			焼成	やや不良	底外面	ロクロナデ	
22	128	須恵器	蓋	口径	(14.9)	35%	精緻	内面	灰（10Y6/1）	内面	ロクロナデ	外面：自然釉。
				摘径	2.9			外面	灰（10Y6/1）	外面	回転ヘラケズリ・ロクロナデ	
				器高	4.1			焼成	良好	底外面	－	
23	128	土師器	杯	口径	(13.4)	25%	赤褐色スコリア粒多	内面	にぶい褐（7.5YR5/4）	内面	ミガキ	内面：口唇部磨滅。
				底径	丸底			外面	にぶい褐（7.5YR5/4）	外面	ヨコナデ・ミガキ・ヘラケズリ	
				器高	4.3			焼成	やや不良	底外面	－	
24	128	土師器	杯	口径	(14.8)	35%	白色微砂粒	内面	明赤褐（5YR5/6）	内面	ヘラナデ後ミガキ	内面：被熱し黒く変色、剥がれ。輪積痕。
				底径	丸底			外面	明赤褐（5YR5/6）	外面	ヨコナデ・ヘラケズリ後ミガキ	
				器高	6.0			焼成	良好	底外面	－	
25	128	土師器	小型甕	口径	(13.6)	30%	砂粒多	内面	明赤褐（5YR5/6）	内面	ナデ	
				底径	5.0			外面	明赤褐（5YR5/6）	外面	ヨコナデ・ヘラケズリ	
				器高	11.45			焼成	良好	底外面	－	
26	128	土師器	甕	口径	(21.8)	口縁～胴部上半 20%	雲母多	内面	にぶい黄橙（10YR6/4）	内面	ヘラナデ	内面：炭化物付着。
				底径	-			外面	にぶい橙（7.5YR6/4）	外面	ナデ	
				器高	<13.6>			焼成	良好	底外面	－	

No.	遺構No.	種類	器種	法量（cm）		遺存度	胎土	色調（色処理）・焼成		技法		備考
27	129	土師器	坏	口径	(15.0)	口縁～体部 35%	白色砂粒多	内面	灰（5Y6/1）	内面	ロクロナデ	
				底径	-			外面	灰（5Y6/1）	外面	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	
				器高	<4.0>			焼成	良好	底外面	－	
28	129	土師器	甕	口径	(15.0)	20%	白色微砂粒多	内面	明赤褐（5YR5/6）	内面	ヨコナデ・ヘラナデ	
				底径	-			外面	明赤褐（5YR5/6）	外面	ヨコナデ・ヘラケズリ後ミガキ	
				器高	<16.35>			焼成	良好	底外面	－	
29	129	土師器	甕	口径	13.9	95%	微砂粒	内面	にぶい赤褐（5YR5/4）	内面	ヨコナデ・ヘラナデ	被熱。
				底径	8.6			外面	にぶい赤褐（5YR5/4）	外面	ヨコナデ・ヘラケズリ	
				器高	20.85			焼成	良好	底外面	ヘラケズリ	
30	129	土師器	甕	口径	-	胴～底部 70%	微砂粒	内面	にぶい橙（7.5YR6/4）	内面	ヘラケズリ	
				底径	7.6			外面	にぶい褐（7.5YR5/3）	外面	ヘラケズリ	
				器高	<8.4>			焼成	やや不良	底外面	－	
31	129	土師器	甑	口径	27.7	100%	白色微砂粒	内面	にぶい赤褐（5YR5/4）	内面	ヨコナデ・ヘラケズリ後ミガキ・ナデ	把手３ケ所。
				底径	10.0			外面	にぶい褐（7.5YR5/3）	外面	ヨコナデ・ヘラケズリ後ミガキ	
				器高	24.9			焼成	良好	底外面	－	
32	130	須恵器	坏	口径	-	体～底部 60%	白色砂粒	内面	黄灰（2.5Y6/1）	内面	ロクロナデ	
				底径	8.0			外面	黄灰（2.5Y6/1）	外面	ロクロナデ・ヘラケズリ	
				器高	<2.9>			焼成	良好	底外面	回転ヘラ切り後ヘラケズリ	
33	130	土師器	坏	口径	14.0	60%	微砂粒	内面	黒褐（5YR2/1）	内面	ミガキ	
				底径	丸底			外面	灰褐（5YR5/2）	外面	ヨコナデ・ヘラケズリ後ミガキ	
				器高	<3.8>			焼成	良好	底外面	－	
34	130	土師器	高坏	口径	16.5	坏部 75%	微砂粒	内面	明赤褐（2.5YR5/6）	内面	ヨコナデ・ミガキ	胎土自体赤く発色。
				底径	-			外面	明赤褐（2.5YR5/6）	外面	ヨコナデ・ナデ	
				器高	<5.8>			焼成	良好	底外面	－	
35	130	土師器	高坏	口径	-	脚～底部 70%	微砂粒	内面	橙（5YR6/6）	内面	ナデ・絞り痕	被熱，器面剥落。、胎土自体赤く発色。
				底径	(12.2)			外面	橙（5YR6/6）	外面	ミガキ・ヘラケズリ後ナデ	
				器高	<7.9>			焼成	良好	底外面	－	
36	130	土師器	椀	口径	(9.5)	45%	白色微砂粒	内面	黒褐（5YR3/1）	内面	ヘラナデ	内面：黒い
				底径	(5.2)			外面	にぶい赤褐（5YR5/4）	外面	ヨコナデ・ヘラケズリ後ナデ	
				器高	7.5			焼成	良好	底外面	－	
37	130	土師器	甕	口径	(25.0)	口縁～胴部上半 20%	雲母粒	内面	灰黄褐（10YR4/2）	内面	ヨコナデ・ヘラナデ	
				底径	-			外面	にぶい黄褐（10YR5/4）	外面	ヨコナデ・ナデ	
				器高	<11.4>			焼成	良好	底外面	－	
38	130	土師器	甕	口径	(23.0)	30%	白色砂粒・砂礫多量	内面	明赤褐（5YR5/6）	内面	ヨコナデ・ヘラナデ	内外面：肩部が黒い。
				底径	(9.5)			外面	明赤褐（5YR5/6）	外面	ナデ・ミガキ	
				器高	33.9			焼成	良好	底外面	木葉痕	
39	141	ミニチュア土器		口径	4.3	100%	微砂粒・雲母粒	内面	にぶい褐（7.5YR5/4）	内面	ユビナデ	手捏ね土器。摩滅顕著。
				底径	5.7			外面	にぶい褐（7.5YR5/4）	外面	ユビナデ	
				器高	3.7			焼成	やや不良	底外面	－	
40	141	土師器	坏	口径	13.1	100%	微砂粒	内面	暗赤褐（5YR3/6）	内面	ミガキ	口縁部・底外面磨滅気味。平底意識。
				底径	－			外面	暗赤褐（5YR3/6）	外面	ヨコナデ・ヘラケズリ後ナデ・ミガキ	
				器高	3.75			焼成	良好	底外面	－	
41	141	須恵器	坏	口径	14.1	80%	白色砂粒・砂礫多量	内面	灰（5Y5/1）	内面	ロクロナデ	火だすき
				底径	8.6			外面	灰（5Y5/1）	外面	ロクロナデ・ヘラケズリ	
				器高	4.65			焼成	良好	底外面	回転ヘラケズリ後手持ヘラケズリ	
42	141	須恵器	高台付坏	口径	-	体～底部 25%	精緻	内面	灰白（5Y7/2）	内面	ロクロナデ	胎土白み帯びる。内面：滑らか。
				底径	(10.0)			外面	灰オリーブ（5Y6/2）	外面	ロクロナデ	
				器高	<1.8>			焼成	精緻	底外面	－	
43	141	土師器	甕	口径	(14.0)	口縁～胴部上半 45%	微砂粒多	内面	明赤褐（5YR5/6）	内面	ヨコナデ・ヘラナデ	
				底径	-			外面	明赤褐（5YR5/6）	外面	ヨコナデ・ヘラケズリ	
				器高	<6.1>			焼成	良好	底外面	－	
44	141	土師器	甕	口径	15.8	口縁～胴部上半 50%	微砂粒	内面	にぶい褐（7.5YR5/3）	内面	ヨコナデ・ヘラナデ	整形丁寧。
				底径	-			外面	明赤褐（5YR5/6）	外面	ヨコナデ・ヘラケズリ後ナデ	
				器高	<7.0>			焼成	良好	底外面	－	
45	141	土師器	甕	口径	(22.0)	口縁～胴部上半 25%	白色砂粒多	内面	明赤褐（5YR5/6）	内面	ヨコナデ・ヘラナデ	外面：被熱。
				底径	-			外面	明赤褐（5YR5/6）	外面	ヨコナデ・ヘラナデ	
				器高	<9.6>			焼成	良好	底外面	－	
46	141	土師器	甕	口径	-	頸～底部 40%	微砂粒多	内面	明褐（7.5YR5/6）	内面	ヘラナデ・ミガキ	かなり薄手。
				底径	(5.6)			外面	明褐（7.5YR5/6）	外面	ヨコナデ・ヘラケズリ	
				器高	<28.5>			焼成	良好	底外面	ヘラケズリ	
47	144－1	土師器	坏	口径	11.4	90%	白色微砂粒	内面	にぶい橙（7.5YR6/4）	内面	ミガキ	口縁部特に内側の磨滅顕著。
				底径	丸底			外面	にぶい橙（7.5YR6/4）	外面	ヨコナデ・ヘラケズリ後ミガキ	
				器高	3.9			焼成	やや不良	底外面	ヘラケズリ後ミガキ	
48	144－1	土師器	坏	口径	11.2	60%	微砂粒	内面	橙（5YR6/6）	内面	ナデ・ミガキ	器面磨滅気味。器面被熱？
				底径	4.9			外面	橙（5YR6/6）	外面	ヨコナデ・ヘラケズリ後ナデ	
				器高	4.6			焼成	やや不良	底外面	ヘラケズリ	
49	144－1	土師器	坏	口径	12.7	90%	微砂粒	内面	橙（5YR6/6）	内面	ナデ後ミガキ	
				底径	丸底			外面	橙（5YR6/6）	外面	ミガキ・ヘラケズリ	
				器高	5.3			焼成	良好	底外面	ヘラケズリ	
50	144－1	土師器	坏	口径	12.8	90%	白色微砂粒	内面	にぶい褐（7.5YR6/3）	内面	ヨコナデ・ミガキ	全体にわたり磨滅顕著。
				底径	丸底			外面	にぶい褐（7.5YR5/3）	外面	ヨコナデ・ヘラケズリ後ミガキ	
				器高	4.4			焼成	良好	底外面	－	
51	144－1	土師器	坏	口径	12.2	90%	白色砂粒・微砂粒	内面	にぶい褐（7.5YR5/4）	内面	ヨコナデ・ヘラナデ後ミガキ	口縁対に打ち欠き状。
				底径	丸底			外面	にぶい褐（7.5YR5/4）	外面	ヨコナデ・ヘラケズリ	
				器高	4.7			焼成	良好	底外面	－	
52	144－1	土師器	坏	口径	13.8	90%	白色砂粒・微砂粒	内面	明赤褐（5YR5/6）	内面	ナデ	全体的に磨滅。
				底径	丸底			外面	明赤褐（5YR5/6）	外面	ヨコナデ・ヘラケズリ後ミガキ	
				器高	4.2			焼成	良好	底外面	－	

No.	遺構No.	種類	器種	法量（cm）		遺存度	胎土	色調（色処理）・焼成		技法		備考
53	144-1	土師器	坏	口径	13.9	85%	砂粒	内面	黒褐（5YR2/1）	内面	ナデ	
				底径	丸底			外面	橙（5YR6/6）	外面	ヨコナデ・ヘラケズリ後ミガキ	
				器高	4.5			焼成	やや不良	底外面	−	
54	144-1	須恵器	坏	口径	(15.5)	30%	白色砂粒	内面	灰白（5Y7/2）	内面	ロクロナデ	
				底径	(7.8)			外面	灰白（5Y7/2）	外面	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	
				器高	4.35			焼成	やや不良	底外面	回転ヘラケズリ	
55	144-1	須恵器	広口長頸壺	口径	-	頸～胴部 35%	精緻	内面	灰白（10Y7/1）	内面	ロクロナデ	内外面：自然釉。
				底径	-			外面	灰（10Y6/1）	外面	ロクロナデ	
				器高	<8.2>			焼成	精緻	底外面	−	
56	144-1	土師器	甕	口径	11.0	90%	白色微砂粒	内面	にぶい橙（7.5YR6/4）	内面	ヨコナデ・ヘラナデ	被熱。
				底径	7.6			外面	にぶい橙（7.5YR6/4）	外面	ヨコナデ・ヘラケズリ	
				器高	10.5			焼成	やや不良	底外面	ヘラケズリ	
57	144-1	土師器	甕	口径	-	胴部上半～底部 50%	砂粒	内面	黒褐（5YR2/1）	内面	ヘラナデ・ミガキ	底外面凹凸あり。
				底径	8.3			外面	にぶい赤褐（5YR4/3）	外面	ヘラケズリ・ミガキ	
				器高	<12.9>			焼成	良好	底外面	−	
58	144-1	土師器	甕	口径	(22.6)	50%	白色砂粒・砂礫多・雲母粒微量	内面	にぶい黄橙（10YR6/4）	内面	ヨコナデ・ヘラナデ	内面：器面剥落。
				底径	8.0			外面	にぶい黄橙（10YR6/4）	外面	ヨコナデ・ヘラケズリ・ミガキ	
				器高	34.0			焼成	良好	底外面	木葉痕	
59	144-1	土師器	甑	口径	19.4	95%	白色砂粒多	内面	にぶい橙（7.5YR6/4）	内面	ヨコナデ・ミガキ・ヘラケズリ	使用による器面剥落（全周）。
				底径	9.4			外面	にぶい橙（7.5YR6/4）	外面	ヨコナデ・ヘラケズリ	
				器高	21.3			焼成	良好	底外面	−	
60	144-1	土師器	甑	口径	25.4	95%	白色微砂粒	内面	灰褐（7.5YR5/2）	内面	ヨコナデ・ヘラナデ	
				底径	8.9			外面	にぶい橙（7.5YR6/4）	外面	ヨコナデ・ヘラケズリ後ミガキ	
				器高	23.4			焼成	良好	底外面	−	
61	145	土師器	坏（特殊）	口径	(6.4)	口縁～胴部上半 35%	白色微砂粒	内面	明赤褐（5YR5/6）	内面	ナデ	胎土自体が赤く発色。
				底径	-			外面	明赤褐（5YR5/6）	外面	ヨコナデ・ヘラケズリ後ナデ	
				器高	<3.3>			焼成	良好	底外面	−	
62	145	土師器	坏	口径	12.8	95% ほぼ完形	赤褐色スコリア粒多	内面	にぶい橙（7.5YR6/4）	内面	ナデ後ミガキ	口縁一部欠け、擦れている。
				底径	丸底			外面	にぶい橙（7.5YR6/4）	外面	ヨコナデミガキ状・ヘラケズリ強	
				器高	5.1			焼成	良好	底外面	ヘラケズリ強	
63	145	土師器	甕 or 甑	口径	(23.0)	口縁～胴部下位 30%	赤褐色スコリア粒	内面	にぶい赤褐（5YR5/4）	内面	ミガキ	内面：まだらに剝がれ。
				底径	-			外面	にぶい赤褐（5YR5/4）	外面	ヨコナデ・ヘラケズリ後ミガキ	
				器高	<25.5>			焼成	良好	底外面	−	

第6表　土製品・石製品計測表

No.	遺構No.	遺物No.	材質	器種	長さ（mm）	幅（mm）	最大厚（mm）	重量（g）
土1	101	56	土製	丸玉	径 9.0	−	6.5	0.58
土2	101	57	土製	丸玉	径 7.8	−	7.2	0.51
土3	127	20	土製	勾玉	21.0	15.0	13.0	2.30
土4	127	21	土製	勾玉	25.0	12.5	12.5	3.33
土5	129	14・22	土製	羽口？	70.0	63.0	34.0	115.93
石1	144-1	132	滑石（蛇紋岩）	紡錘車	32.0	6.0	17.5	29.38
石2	102	154	軽石		63.0	54.0	25.0	35.16
石3	102	165	軽石		95.0	74.0	64.0	105.72
石4	144-1	1	軽石		36.0	34.5	22.0	7.42
石5	102	166	凝灰岩	砥石	173.0	96.0	22.0	602.77
石6	127	8・89	凝灰岩	砥石	115.0	89.0	15.0	191.13
石7	141	13	砂岩	砥石	156.0	73.0	47.0	669.55
石8	144-1	3	凝灰岩	砥石	55.0	24.5	20.0	30.02

第7表　金属製品計測表

No.	遺構No.	遺物No.	材質	製品名	長さ（mm）	幅（mm）	最大厚（mm）	重量（g）
金1	130	040	鉄	鉄鏃	111.0	9.0	3.5	9.3
金2	129	025	鉄	鉄鏃	30.0	27.0	3.0	6.3
金3	144-1	167	鉄	鎌	179.0	36.0	3.7	68.3
金4	144-1	097	鉄	鎌？	64.0	41.0	6.0	41.0
金5	141	053	鉄	刀子	35.0	12.0	4.0	3.8
金6	141	064	鉄	刀子	100.0	13.0	4.0	10.3
金7	141	101	鉄	鉄釘	40.0	8.0	4.2	2.9
金8	102	038	鉄	稲摘具？	34.0	23.0	2.0	330.0
金9	128	002	鉄	工具の柄？	41.0	18.0	3.0	7.6
金10	144-1	177	鉄	不明	36.0	30.0	9.0	15.1
金11	130	045	鉄　滓		22.7	23.7	16.1	11.5
金12	6トレンチ	004	鉄　滓		32.8	50.3	29.3	55.0

第3章　まとめ

今回の東海道遺跡の発掘調査成果について、時代毎に以下にまとめる。

旧石器時代は、確認調査を調査対象面積の４％に対して実施したが、遺物は確認できなかった。上層調査中に剝片などが出土したが、確実に旧石器時代と判断できる遺物はない。

縄文時代の遺構は、竪穴住居跡２軒と土坑が検出された。竪穴住居跡は近接して分布し、ともに中期の加曽利ＥⅠ式期と考えられる。掘り込みは明瞭ではなかったが、その内１軒には土器囲炉が付設されていた。遺物では花崗岩製の大型凹石が床面から出土したが、他に特殊遺物はない。遺構外からは中期の土器片が多く、土製品では土器片錘の出土が目立つ。他に後期堀之内式期の土器片も出土したが少量である。

弥生時代～古墳時代後期には調査区内からの遺構・遺物は確認されず、古墳時代終末期以降、奈良・平安時代にかけての竪穴住居跡12軒、掘立柱建物跡１棟などが検出された。他に中・近世から形成されたと考えられる溝状遺構を検出した。区画の溝や道路跡であり、現代の区画とも重なるものが多い。

東海道遺跡の東に谷を挟んだ台地上では松崎工業用地造成整備事業に伴う発掘調査が大規模に実施され、台地の大部分が調査された。しかし、奈良・平安時代遺構の分布は極めて散漫であり、当該遺跡との直接的な関連性は見いだせない。一方、西側隣接地で調査された前戸遺跡では遺構･遺物の様相は共通し、一体の遺跡と捉えられる。前戸遺跡では、古墳時代終末期から平安時代初頭の竪穴住居跡16軒、掘立柱建物跡５棟が調査された[1)]。両遺跡で時期の判明した23軒の竪穴住居跡は第17図のとおりの分布となる。時期別の内訳は１期（７世紀後半）が７軒、２期（７世紀末～８世紀初）が９軒、３期（８世紀中頃）が３軒、４期（８世紀末～９世紀前半）が４軒である。各時期の住居分布に大きな偏りはなく、また単独ではなく複数の竪穴住居がセットとなる。奈良時代後半～平安時代の竪穴住居跡は少ない。須恵器の甕・甑類が破片を含めても少量であり、調査区外に平安時代以降の集落が大規模に展開している可能性は低い。８世紀後葉～９世紀にかけて集落規模が拡大する船尾白幡遺跡や鳴神山遺跡に比べ、集落規模のピークとしては一段階早い展開を示す。周辺の大規模開発で面的な調査が実施され、拠点集落とされる遺跡の遺構分布状況をみても近接する時期の竪穴住居跡が密に切り合う状況ではない。東海道遺跡・前戸遺跡は調査区の幅が狭く、視覚的には散漫な遺構分布に見えるが、古墳時代終末期から奈良時代前半については拠点とまではいえないものの、立地する台地平坦部が広いこともあり、ある程度の規模を有した集落であった可能性が高い。また、印旛郡市文化財センターで調査を行った前戸遺跡[2)]の調査区から瓦塔破片が出土していることも遺跡の性格を考える上で留意する必要がある。

このように、路線幅の調査であったが、事業地は広大な台地平坦面の中央を東西方向に横断する形となっており、台地全体に展開すると考えられる古代の集落について、大まかな時期変遷や占地の傾向を把握することができた。周辺地域での船尾白幡遺跡・鳴神山遺跡・西根遺跡・松崎遺跡群・木戸口遺跡などの大規模調査成果に準じる、より広域で具体的な古代の集落景観を検討するための貴重な資料である。

注１　内田龍哉ほか 2004『印西市新井堀Ⅱ遺跡・前戸遺跡－印西市道 00-026 号線道路改良に伴う埋蔵文化財調査報告書－』
千葉文化財センター調査報告第 481 集

２　伊藤弘一 2005『千葉県印西市前戸遺跡－印西市道 00-116 号線埋蔵文化財調査－』
印旛郡市文化財センター発掘調査報告第 223 集

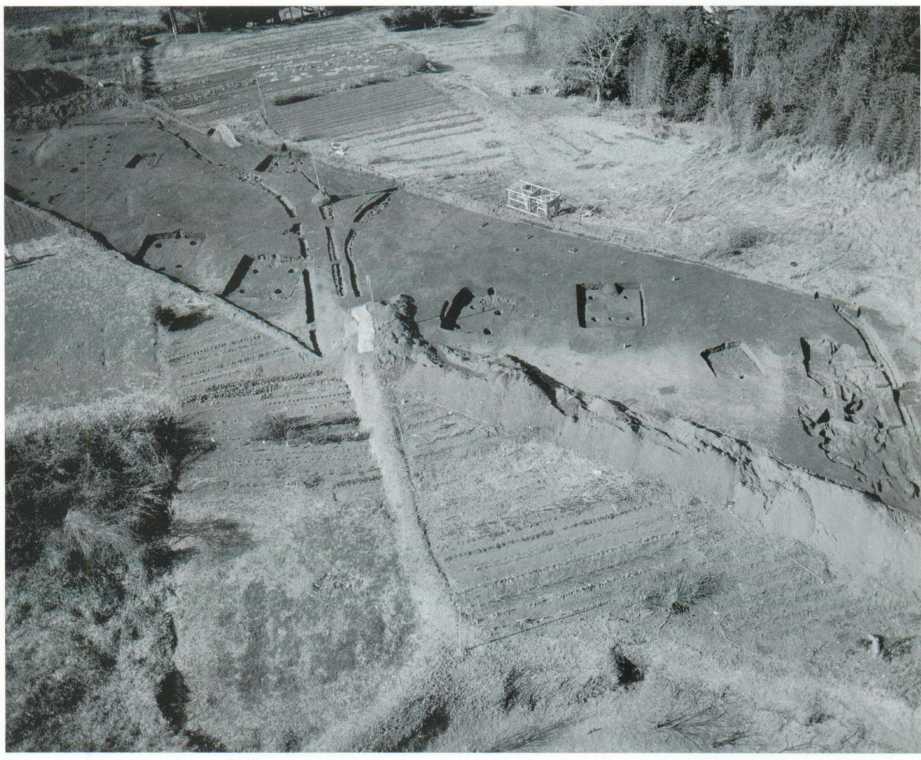
時期		東海道遺跡	前戸遺跡
1期		144-1・145	002・003・004・006・014
2期		101・102・121・128・129・130	001・005・011
3期		127・141	015
4期		122	008・009・201

第17図　古墳時代以降遺構変遷図

写　真　図　版

図版 1

調査区（東から）



調査区（南から）

調査区中央

（手前が北）

図版 2

101

102

102 南壁遺物出土

108

122

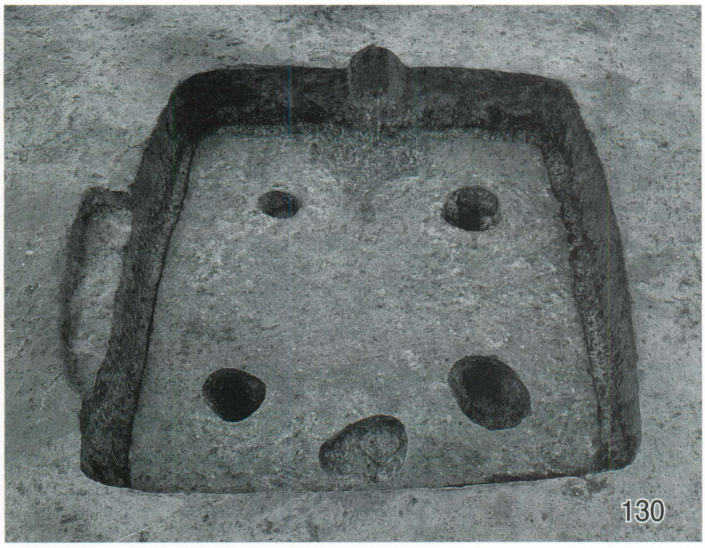
122 遺物出土

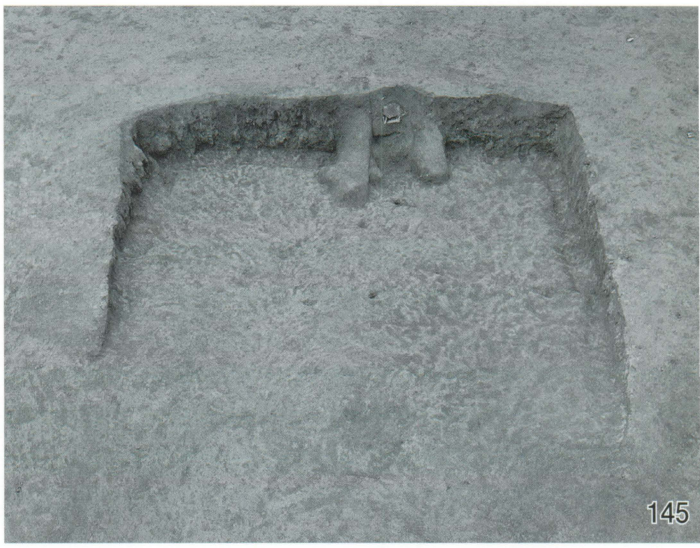
127

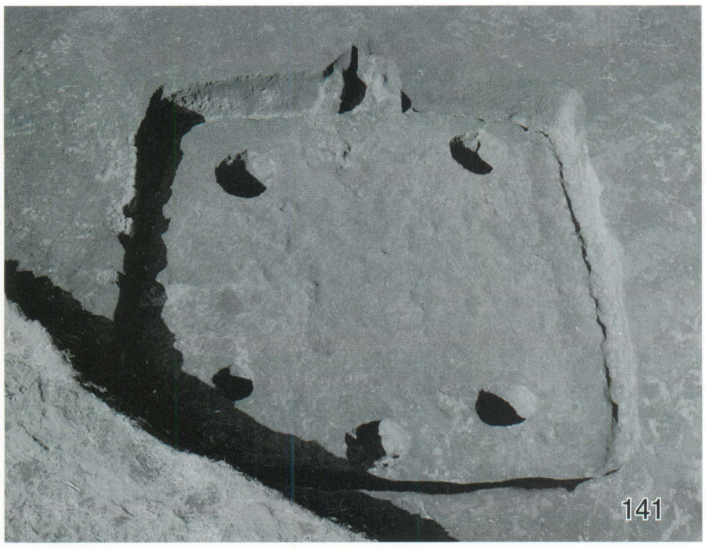
128

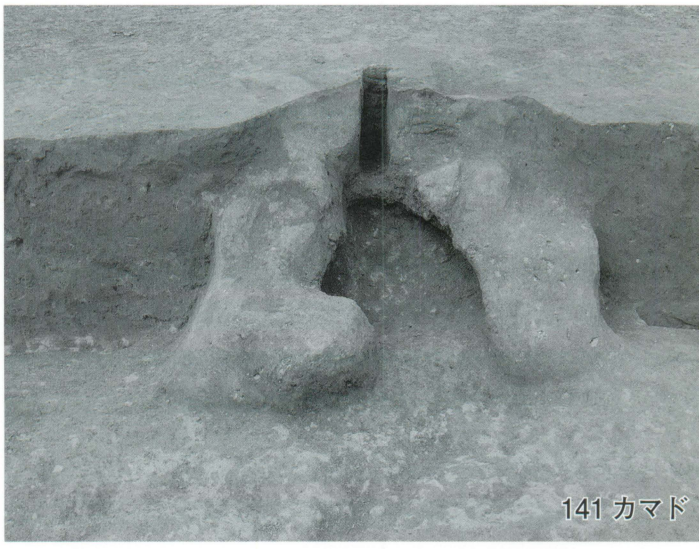
129

129 カマド右袖遺物出土


130


145


141


141 カマド

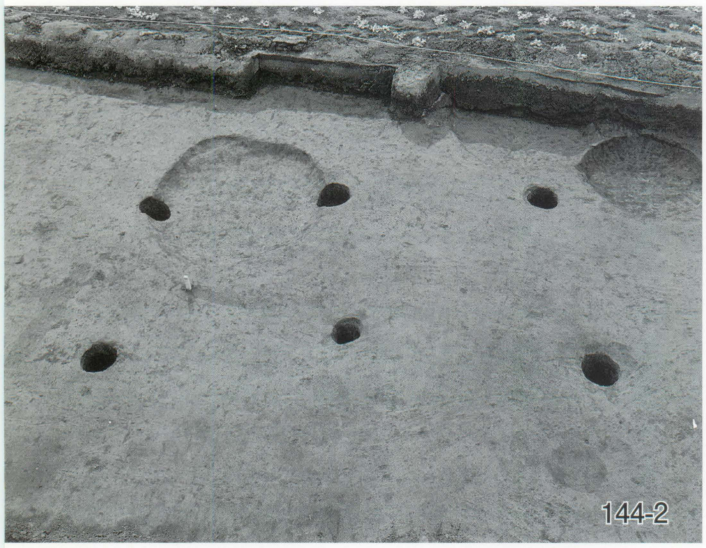
144-1

144-1 カマド右袖遺物出土

図版4

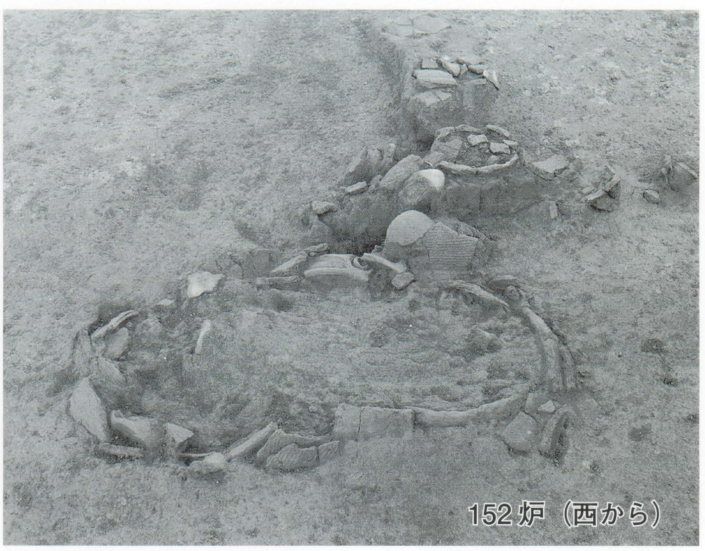
133

132・133
(手前)


144-2

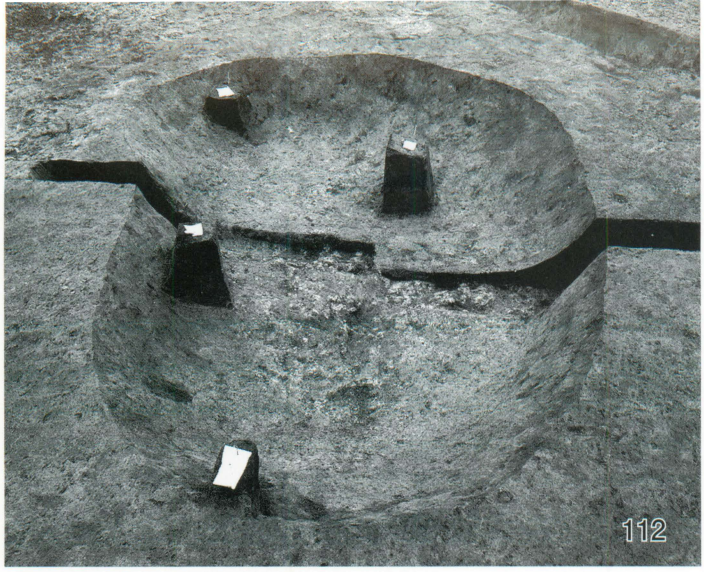
調査区西端

152

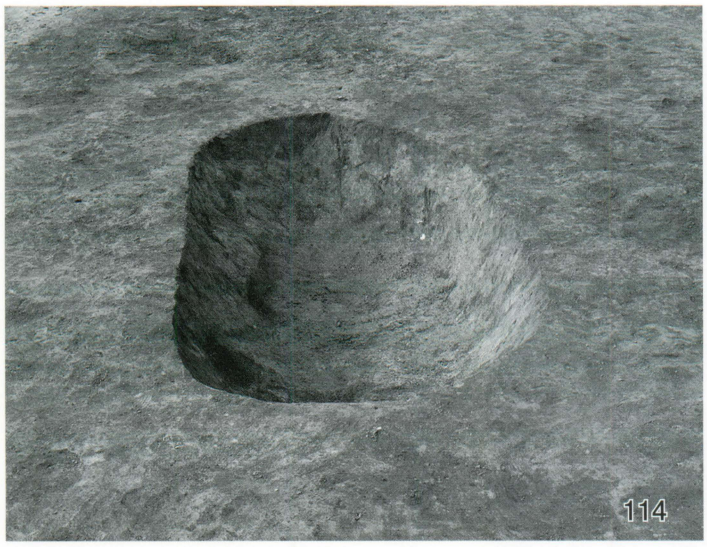

152炉（西から）

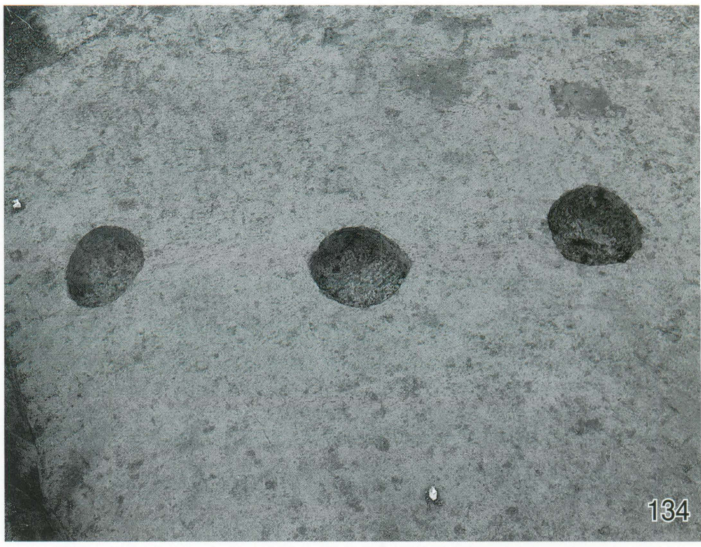
152炉（東から）

153


112

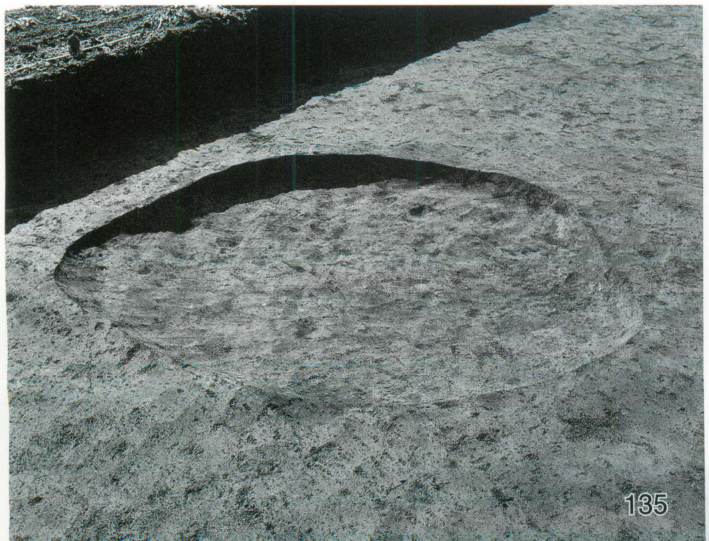
113

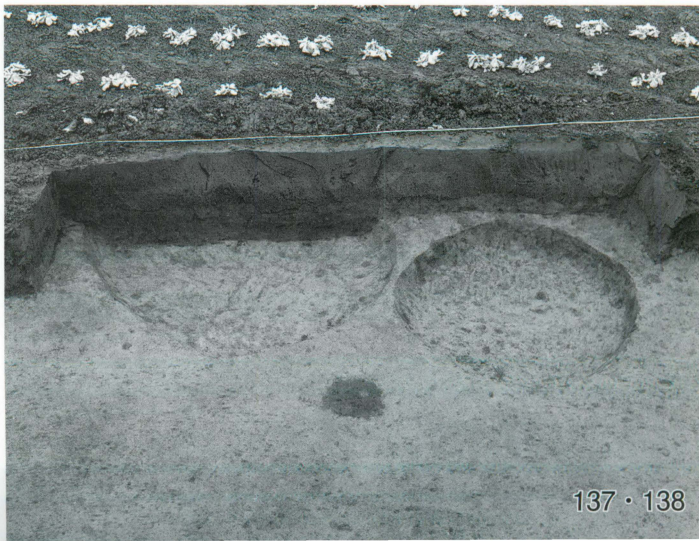

114


134

125（南から）

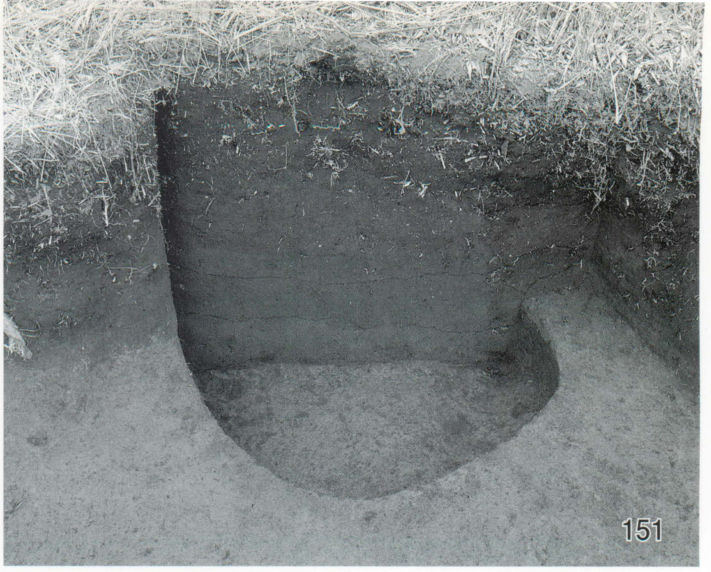
125（東から）


135


137・138

図版 6

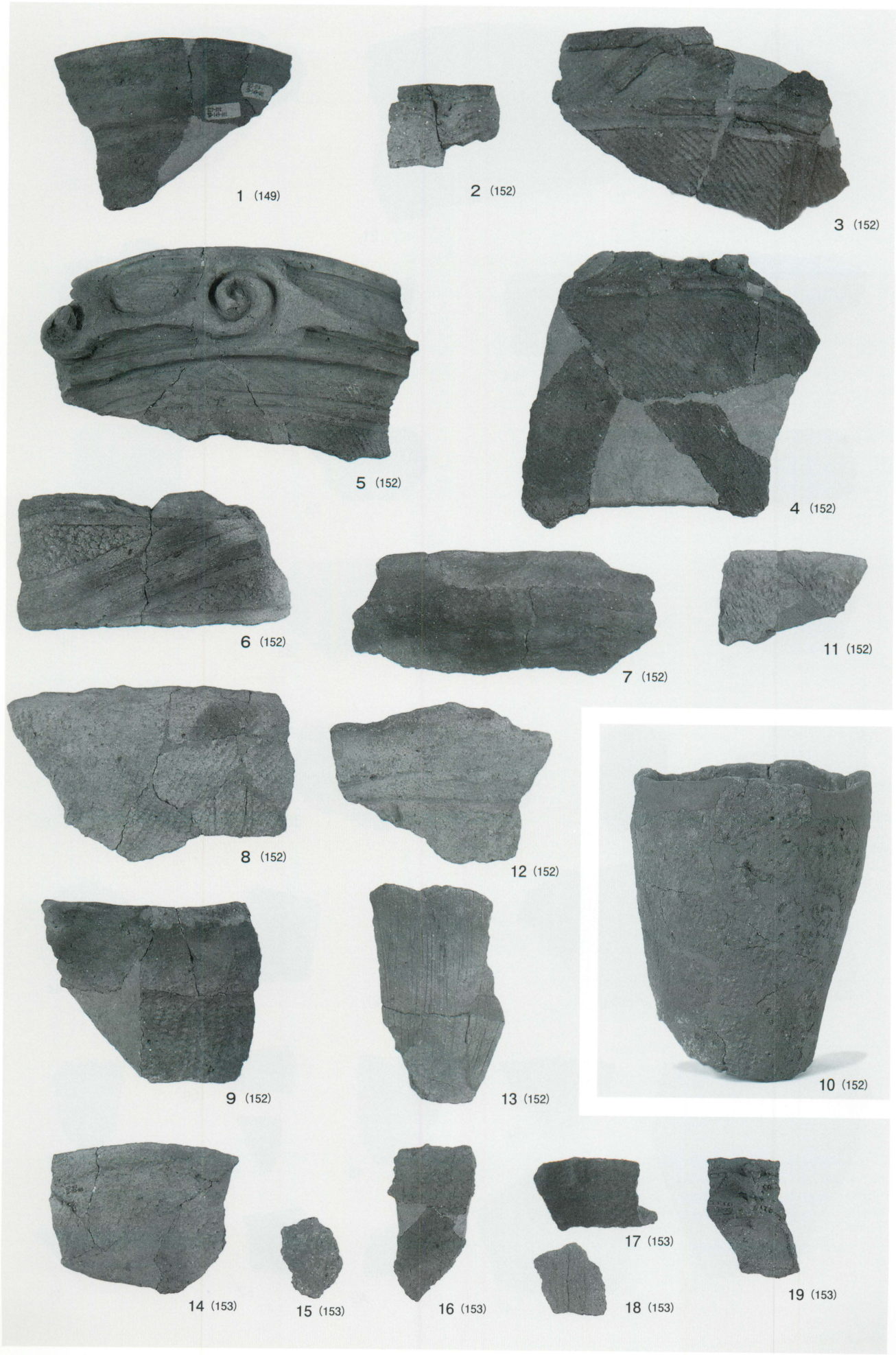
150



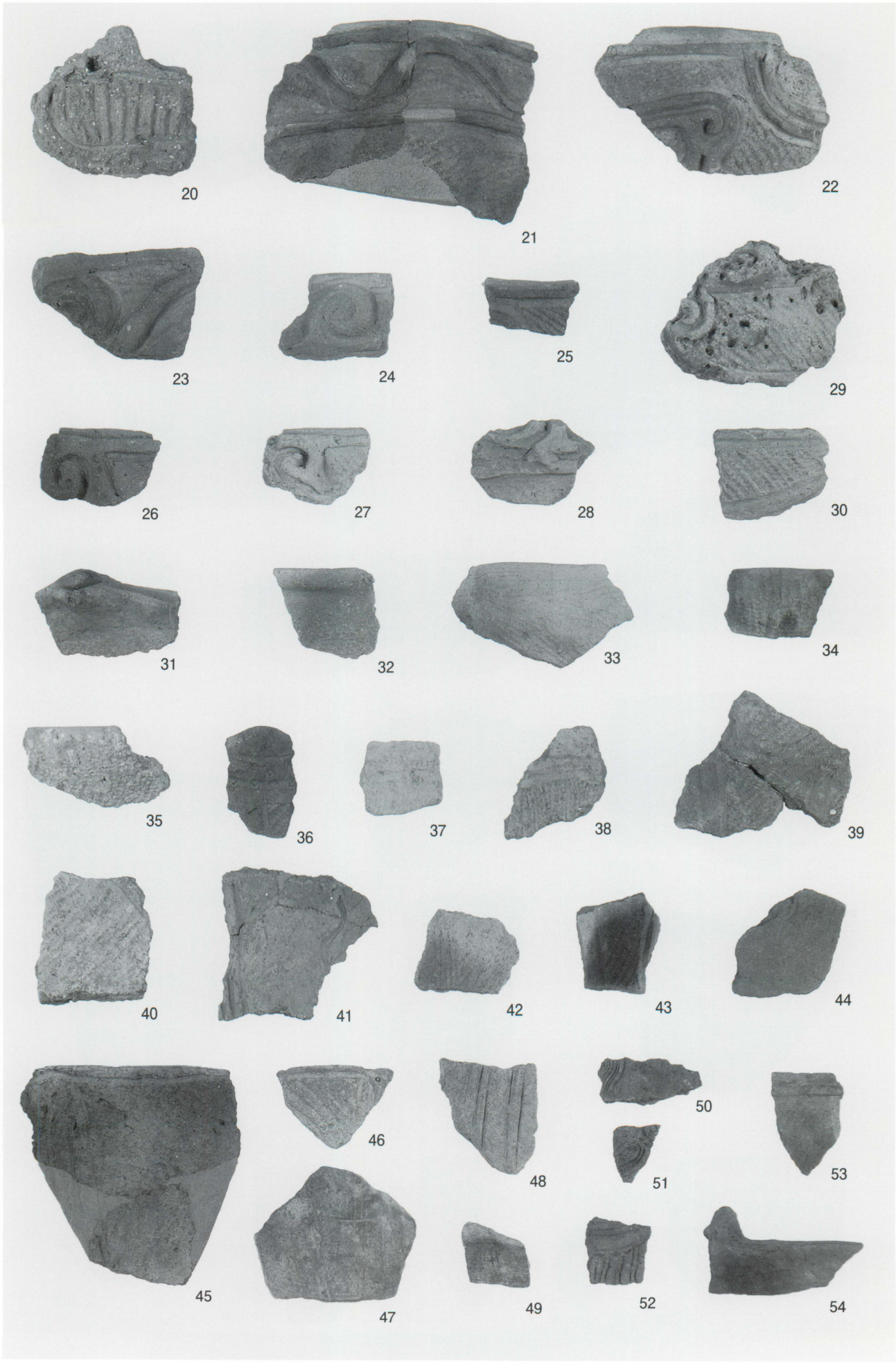
151

109

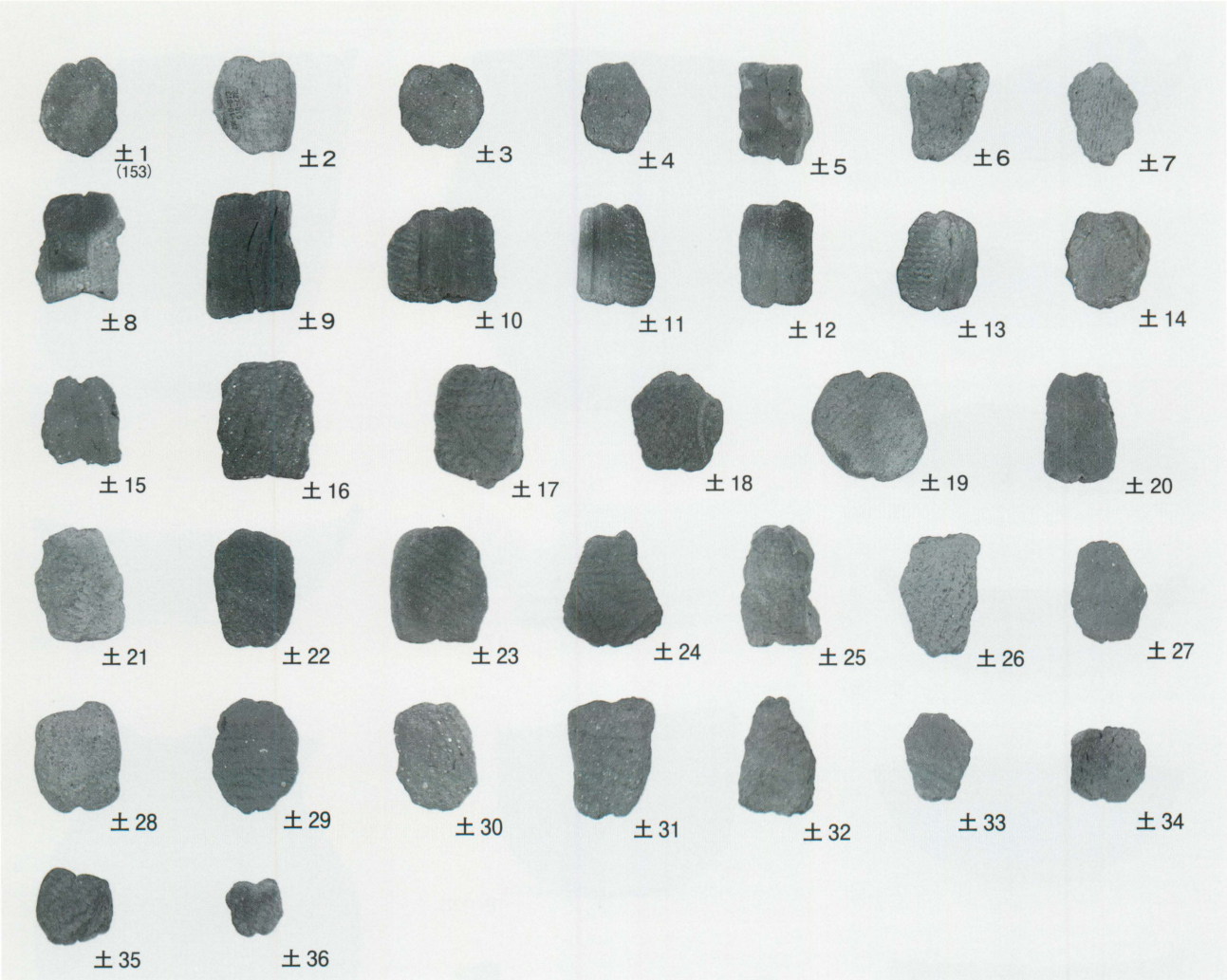
146・147・148

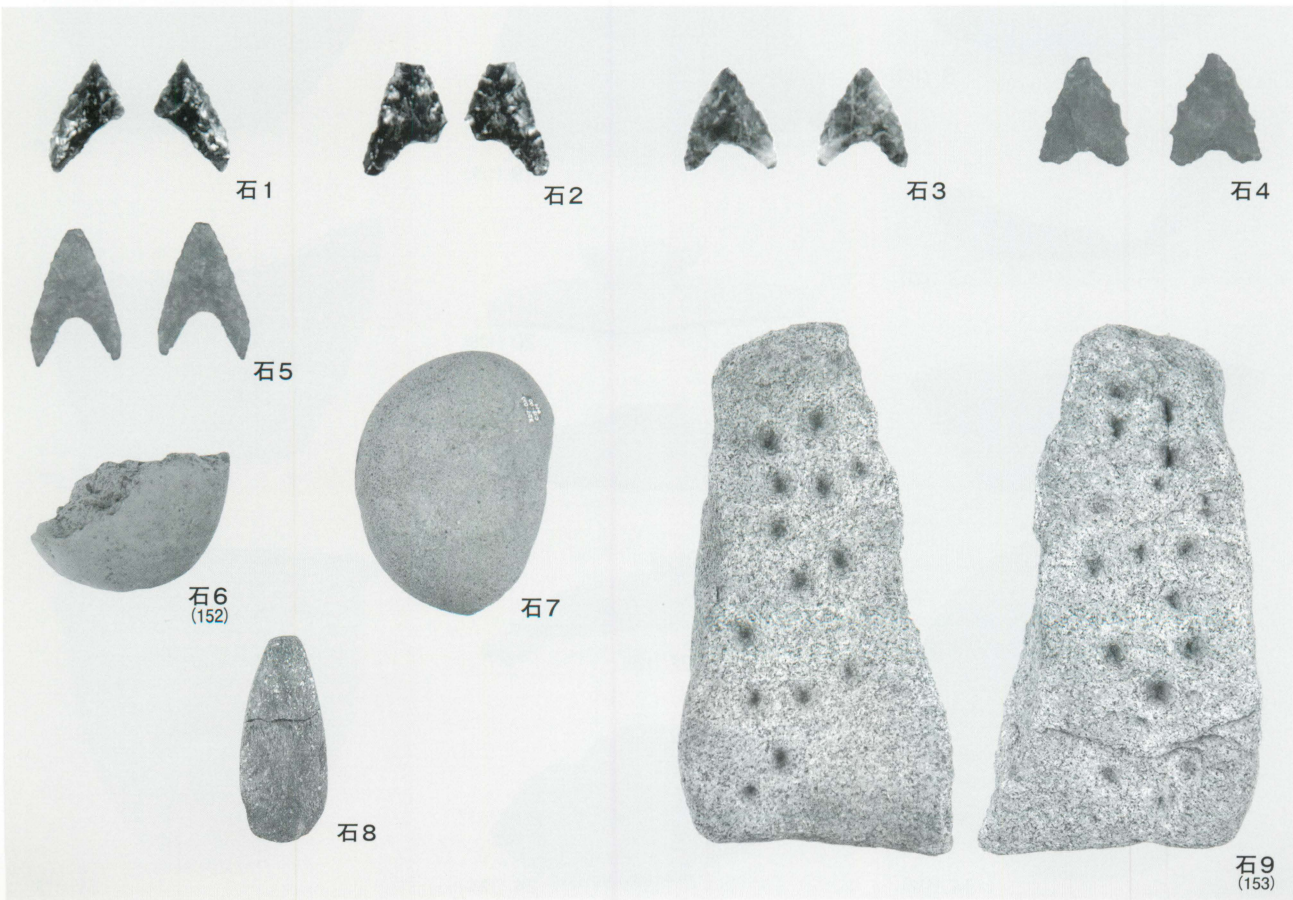

1 (149)
2 (152)
3 (152)
5 (152)
4 (152)
6 (152)
7 (152)
11 (152)
8 (152)
12 (152)
10 (152)
9 (152)
13 (152)
14 (153)
15 (153)
16 (153)
17 (153)
18 (153)
19 (153)

縄文時代遺物（1）


20
21
22
23
24
25
29
26
27
28
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
48
50
51
53
47
49
52
54

縄文時代遺物（2）


土1
(153)
土2
土3
土4
土5
土6
土7
土8
土9
土10
土11
土12
土13
土14
土15
土16
土17
土18
土19
土20
土21
土22
土23
土24
土25
土26
土27
土28
土29
土30
土31
土32
土33
土34
土35
土36


石1
石2
石3
石4
石5
石6
(152)
石7
石8
石9
(153)

縄文時代遺物（3）

1 (101)

2 (102)

3 (102)

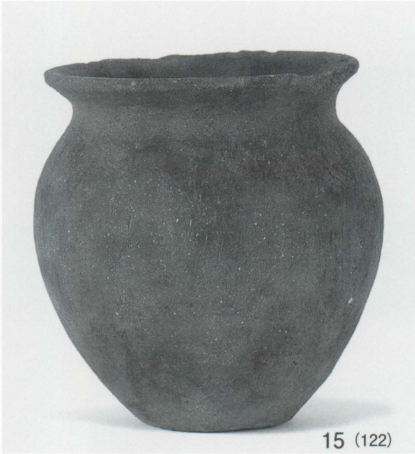
5 (102)

7 (102)

8 (102)

13 (121)

14 (122)

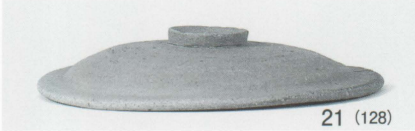

15 (122)

17 (127)

18 (127)

19 (127)

20 (128)


21 (128)

22 (128)

24 (128)

25 (128)

27 (129)

29 (129)

30 (129)

31 (129)

古墳時代以降遺物（1）

32 (130)

33 (130)

34 (130)

35 (130)

38 (130)

39 (141)

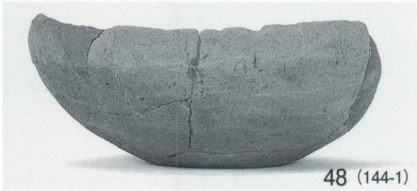
40 (141)

41 (141)

44 (141)

46 (141)

47 (144-1)


48 (144-1)

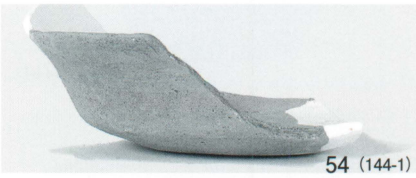
49 (144-1)

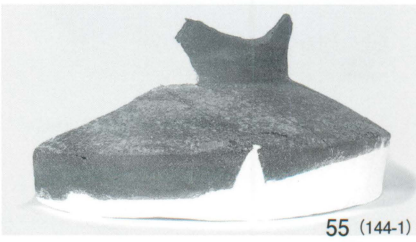
50 (144-1)

51 (144-1)

52 (144-1)

53 (144-1)


54 (144-1)


55 (144-1)

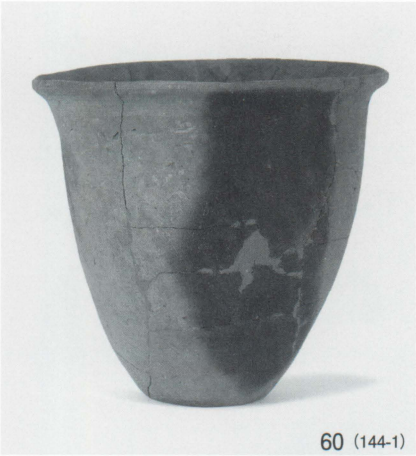
56 (144-1)

57 (144-1)

58 (144-1)

古墳時代以降遺物（2）

59 (144-1)


60 (144-1)

63 (145)

61 (145)

62 (145)

古墳時代以降遺物（3）

報告書抄録

ふりがな	いんざいしとうかいどういせき
書名	印西市東海道遺跡
副書名	印西市道 00 － 026 号線道路改良に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第 723 集
編著者名	黒沢　崇
編集機関	公益財団法人　千葉県教育振興財団　文化財センター
所在地	〒 284-0003　千葉県四街道市鹿渡 809 番地の 2　TEL：043-424-4848
発行年月日	2014 年 1 月 10 日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
東海道遺跡（とうかいどういせき）	印西市松崎（いんざいしまつざき） 字東海道（あざとうかいどう） 1351-2 ほか	12327	010	35 度 46 分 44 秒	140 度 8 分 24 秒	19971001 ～ 19980228	2,735	印西市道 00 － 026 号線道路改良
				世界測地系 WGS84				

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東海道遺跡	集落跡	縄文時代 古墳時代～奈良・平安時代	竪穴住居跡　2 軒 土坑 竪穴住居跡　12 軒 掘立柱建物跡 土坑・ピット群 溝	縄文土器・石器・土製品 土師器・須恵器・鉄製品	古墳時代終末期から奈良時代を中心とした集落が検出され、発掘調査で明らかにされている周辺地域の古代の集落様相がより具体化した。

要約

旧石器時代の痕跡は確認できなかった。縄文時代の遺構は竪穴住居跡２軒と土坑群が検出された。竪穴住居跡の時期は中期（加曽利ＥＩ式）で，掘込みは明瞭ではなかったが，土器囲炉が付設されていた。遺構外からも中期の土器片が多く，土器片錘も出土した。弥生時代～古墳時代後期には調査区内に遺構・遺物は確認されず，古墳時代終末期以降から奈良・平安時代にかけて集落が継続する。遺構としては竪穴住居跡を主体とするが、小規模な掘立柱建物跡も検出された。竪穴住居跡に切り合いはない。調査区は狭長であるが，台地中央部を横断する形となっているため，同事業・同路線の隣接する前戸遺跡の調査成果をあわせ，当時の集落の様相を復元する上で貴重な基礎資料が得られた。周辺地域では船尾白幡遺跡・鳴神山遺跡・西根遺跡・松崎遺跡・木戸口遺跡などの大規模調査成果が蓄積されており、より具体的な古代の集落景観についての資料が追加されたこととなった。

千葉県教育振興財団調査報告第723集

印西市東海道遺跡

—印西市道00－026号線道路改良に伴う埋蔵文化財調査報告書—

平成26年1月10日発行

編　集　公益財団法人　千葉県教育振興財団
文化財センター

発　行　千葉県企業庁
千葉市美浜区中瀬1－3
幕張テクノガーデンD棟

公益財団法人　千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地の2

印　刷　株式会社　エリート情報社［印刷出版局］
成田市東和田415－10